
ちみっこ団と三つ子と召喚獣

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちみっこ団と三つ子と召喚獣

【Nコード】

N7719W

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

GAU様から借りたひばりとその母親の美空と糖分さんと暁さんFOOLさんから借りたキャラを参加させて。ちみっこ軍団にいておもしろおかしく盛り上げていきたいと思えます。

オリキャラ×オリキャラ、オリキャラ×原作キャラでいきます。

これ前の作品のリニューアルです！

新キャラ参入するかも？

登場作品とキャラ紹介（前書き）

新規リニューアル作品です。

色々悩みながら執筆していききたいと思います！

登場作品とキャラ紹介

登場作品紹介！

- ・「バカと雲雀と召喚獣」から、『支倉ひばり』と『支倉美空』をお借りしてます。
- ・「バカとのんきと召喚獣」から『月野造』をお借りしてます。
- ・「バカとドアホと凶悪な顔」から『山崎巧』をお借りしてます。
- ・「ボクと皆のバカテス日常」から『風宮紅葉』をお借りしてます。
- ・「バカと天使と超能力者」から『水野彩華』をお借りしております。

登場キャラ紹介！

『新条ありす』

- ・身長…136cm
- ・性格…明るく元気で優しい
- ・容姿…水色のツイン・テールで紫色の瞳。
- ・超能力…【空間転移^{テレポート}】
- ・LV4の【テレポーター（空間跳躍者）】
- ・体型…小柄でつるぺたで低身長
- ・コンプレックス…胸
- ・得意科目…数学、化学
- ・苦手科目…英語』

『支倉ひばり』

・身長…138cm

・性格…健気で頑張り屋で誰にも等しく優しい

・容姿…黒髪のポニーテールで黒色の瞳。胸はFカップ

・特技…声真似と料理

・明久と冬久と真希と巧の幼なじみでもあり、瑞希の幼なじみであり、つぐみの幼なじみ。

・コンプレックス…低身長と胸

・得意科目…家庭科

・苦手科目…特になし

・成績…Cクラス並

・作者…GAU様

『雨宮つぐみ』

・身長…138cm

・性格…健気で優しくて友達思い

・容姿…茶色のツインテールで鈴付きリボンをつけてる。瞳の色は茶色。胸はEカップ

・特技…明久を起こすこと？

・明久と冬久と真希と巧とひばりの幼なじみで、瑞希の幼なじみ。

・コンプレックス…身長と胸

・得意科目…家庭科

・苦手科目…別がない

・成績…Cクラス並

『秋月終夜』

・身長…180cm

・性格…基本、友と幼なじみに優しくて、敵には容赦がない。

- ・容姿…黒髪の少し短髪で瞳は黒色。
- ・美波の幼なじみ
- ・一人称…俺
- ・備考…小さい頃はドイツに住んでいたけど、両親の都合で引っ越して日本にきた。
- ・趣味…サッカー、合気道、剣道、料理。
- ・得意科目…数学、英語、物理、化学
- ・苦手科目…歴史
- ・観察処分者。』

『相沢綾菜

- ・身長…186cm
- ・一人称…わたし
- ・容姿…文月最強のバストサイズ。
- 髪はミルク多めのミルクティーのような色で、ふわふわした癖のあるロングヘア。
- 少し眠そうな表情が特徴的な美人ではあるものの、どこか幼い童女のような印象を与える。
- ・性格…純真無垢で、赤ちゃんはキャベツから産まれてくると本気で信じている。
- ・学力…Cクラスレベル。保健体育は零点をとるくらい
- ・備考…小さい頃は小柄で体が弱かったが、
- どんどん成長して頑丈な体と誰にも負けない健康体を手に入れた。
- なぜか、とんでもない怪力の持ち主で、鉄筋をアメ細工のようにグニャグニャに曲げたり出来る。
- 性知識は完全にゼロで説明されても理解できない。
- 将来の夢は、『こーちゃん（ムツツリーニのこと）のお嫁さん♪』と笑顔で言い切る。
- ムツツリーニを抱きしめるのが大好きで、スキあらば抱きつこうとするが、

生命の危機に直結するため、よく避けられている。
あまりやられると、子供のように泣き出して、手が着けられなくなる。

・召喚獣…笑顔を浮かべた天使だが、なぜか武器は釘バット。
ひばりとつぐみを抱きしめるのが好き☆』

『山崎巧』

・身長は175くらい（明久より高く、雄二より小さい）。
・容姿）

目付きが悪く鋭い目をしており、顔立ちはまあまあ良い。

撫で肩でウエストも括れているが程よく筋肉がついている。

髪型はショートウルフ。仕事などには髪をオールバックにして挑む。

・性格…明るくて頼もしい、兄貴みtainな存在

・口調…関西弁

・備考）

関西人の母の血が流れているが母は結構普通。

父の名は、巧多こうた

母の名は、久美くみ

吉井三兄妹とひばりとつぐみの幼なじみ

何でも一人でやろうとする。（癖？）

・得意科目…現代社会

・作者…暁巧様から、借りました♪』

『吉井冬久』

・容姿…茶色のショートで少し襟元に後ろ髪がかかるくらいあり。

目は切れ長で顔立ちは明久と少し似ている背丈も同じくらいある方。

・性格…悪戯好きだけど、仲間思い。

根は明久譲りの優しいところがあり、シスコン（真希限定）であり
ブラコンでもある。

・一人称…俺

・成績…Cクラス並かな

・備考…吉井家の三つ子で明久の弟であり、真希の兄。ひばりに好意を寄せている。予知夢をよく見るらしい。』

『吉井真希』

・容姿…9巻のアキちゃんそっくりの容姿で。

・性格…元気で明るくて優しいけど、ブラコンである

・一人称…わたし

・成績…Bクラス並

・備考…吉井家の三つ子の末っ子でひばりと冬久の仲を応援している。

つぐみと明久がくつつくのも応援しているとか。

超能力者で多重スキル使い？

・得意科目…数学、化学』

『月野造』

・年齢…17歳 誕生日…8月13日

・性別…男

・身長…148cm（自己申告）実際は145cm

・体重…42kg

・性格…のんき やや天然

・趣味…お茶を飲むこと、昼寝、お菓子作り

・特技…特になし、あえて言うとな人の顔と名前を（瞬時に）覚えることと掃除

・好きなもの…友人、先生、甘いもの、努力

・苦手なもの…わんこ・にゃんこ、機械、辛いもの

・外見）

童顔で未だに中学生、最悪小学生と間違われる。中性的なルックス。男性にしては長い黒髪

作者…糖分様』

『支倉美空

- ・容姿；ひばりをそのまま大人にした感じで髪をおろしています。
- ・性格…基本的に優しい母親明るくお茶目で悪戯好き。
- ・特技…声真似と演技の悪戯
- ・備考；家事は人並みだけど、ひばりには劣る

ひばりと父と一緒に住んでいる。

仕事が忙しく、留守にしていることが多いですが、娘のひばりを溺愛していて、

『ひばり分』を補充していきます（笑）

明久達のこともお気に入り、息子と娘のように可愛がっている。

・作者…GAU様』

『風宮紅葉

- ・容姿…かりんに似た容姿で可愛い
- ・性別…男
- ・性格…のんびりで優しくて友達思い
- ・成績…総合成績は高い
- ・得意科目…歴史等の暗記物
- ・苦手科目…保健体育など
- ・呼び方…綾菜↓あやちゃん、ありす↓あーちゃん

真希↓まーちゃん、雪菜↓ゆきちゃん。

明久↓アキくん

秀吉↓秀くん

優子↓優ちゃん

瑞希↓瑞希ちゃん

翔子↓翔子ちゃん

康太↓康くん

愛子↓愛子ちゃん

雄二↓雄くん

冬久↓ふゆくん

つぐみ↓つーちゃん

ひばり↓ひーちゃん

造↓つつくん

巧↓たっくん

作者…FOOL様』

『坂本雪菜

・容姿…白い白銀のようなロングヘアで真紅の瞳。とても可愛い

・性格…大人しめで優しくてブラコンで世間知らず。

・一人称…わたし

・備考…体が弱いので入退院を繰り返していた。

勉強は大体兄達と紅葉に教えてもらっていたのでDクラス並。

紅葉に想いを寄せている。

坂本家の長女。』

『新条怜次

・容姿…赤い髪で首辺りまで髪が伸びており、そこで紐を結んでいる。瞳は茶色

・性格…負けず嫌いだけど気まぐれ屋でシスコン

・一人称…俺

・成績…Bクラス並

・得意科目…数学と英語

・苦手科目…日本史かな？

・備考…ありすの兄で翔子に想いを寄せている。

翔子と雄二の幼馴染。』

『芳乃朋よしのか

- ・性別…女
- ・身長…144cm
- ・体重…34kg
- ・年齢…17才
- ・一人称…僕
- ・Fクラス所属
- ・容姿…金色のロングヘアのツインテールで赤色の瞳。
- ・性格…やや天然で、お気楽思考
- ・備考…本来は三年だが、二年生として在籍している。理由は不明
- ・得意科目…数学、物理、化学
- ・苦手科目…保健体育
- ・召喚獣…東方の魔里紗に似てる。魔法使いの衣装着てる。』

『藤堂辰也

- ・性別…男
- ・身長…186cm
- ・特技…剣道と空手
- ・一人称…僕
- ・容姿…赤色のショートヘアで紫色の瞳でイケメン。
- ・備考…成績はAクラス並。
- ・Fクラスに行ったのは面白そうだからという理由で、テストを白紙で出したのが原因。
- ・剣道部主席でエース的存在。
- ・暇な時は剣道部に行き鍛練している。
- ・色恋事に疎くて鈍感。
- ・どこからともなく竹刀を出してFFF団の攻撃をしりぞく。
- ・瑞希の幼馴染。幼いころからの仲。ひばり達とも幼馴染となっている。
- ・得意科目…すべて
- ・苦手科目…特になし

・召喚獣…顔はデフォルメされた辰也で服装は着物で獲物は刀。
愛刀『鬼斬丸』を持ってる』

『名前…水野 彩華^{あやか}』

→真琴の双子の妹

体格…赤い髪のロングヘアで目の色は赤色。

身長は135くらい

性格…重度のシスコン

学力…真琴とは正反対で明久並の学力しかない

→ただし、運動能力だけはズバ抜けている

備考…ありす、つぐみ、えりすと真希と同様に超能力者。

ただ、違うのはつぐみと真希と同様に複数使えるということ。

作者…JACKさん』

エレノアの設定

名前)

エレノア・アリアドネ

外見.. 矢神はやて

学年)

高2

年齢.. 17歳

髪形.. ショートボブ

瞳.. 緑

性格)

- ・ 明るく元気

- ・ 少し短気

- ・ 天然

一人称)

うち

口調.. 関西弁

特技

舞踊

体術（葛木とバセット風）

趣味

木の上か学園の屋根で昼寝

好きな事

高い所が好き。

スレイヤーズのアメリアの真似して見事に着地

嫌いな物

国語の勉強必ず（うがあああつ）になります。

趣味）

可愛い動物を愛でること。

備考）

外国からの帰国子女。

国語以外なら好成绩

国語は壊滅的

召喚獣）

デフォルメしたエレノアで鬼の角が生えていて、武器は日本刀。

プロローグ いつものゆるりとした日常

『ねえねえ。あきくん、ふゆくん』

『なーに、ひーちゃん？』

『どうしたの？ ひーちゃん』

『おっきくなったらどっちがおよめさんしてくれる？』

『おれがひばりちゃんをおよめさんにしてあげる！』

『ほんとう？ やくそくだよ！』

『ひーちゃんとふーくんはなかよしだね』

『うん。あ、つぐみはぼくのおよめさんになってね？』

『ふえ？ うん、やくそくだよ』

『たっくんはあたしをおよめさんにしてくださいね？』

『オレでええなら、いいで』

『もちろんです♪』

ジリリリリリ！

ここで吉井冬久の目が覚める。

「夢…か。幼いころだし、事項だよな」

複雑そうに呟いてから。目ざましを止めて俺は布団から出ようとする

バン！

「冬久！なんで、オレの部屋に真希ちゃんがおんねん！？」

「あ、そっちに行ってたんだ」

ドアが開き、幼馴染の一人の山崎巧が俺の部屋に入ってきた。

俺と三つ子の兄明久の妹真希は幼馴染の一人の巧にいたずらするところが好きでたまに忍び込むことがあるそう。

これも好意があるからできると末っ子の真希は言っていた気がするな。

「どうしてもよさそうに言うなや！」

「だって、巧なら別にいいかなって」

まだ寝起きだからぼけっとしているので俺が言うと巧は突っ込みをいれた。

「冬久、僕は認めてないよ？」

「あれ、アキ兄。なんで覇王のオーラをまってるの？」

「ち、違うんや！明久、オレは連れ込んだわけじゃ！」

吉井家の長男で俺の三つ子の兄である吉井明久。

真希とつぐみとひばりのことになる豹変することがあるらしい。
現にその片鱗があるわけで、だから巧が怯えているんだよな。

「遺言はそれだけ？」

「本当なんや！」

ニツコリと笑ってアキ兄が巧に近寄って言う。

てか、俺の発言は無視ですか？

悲しくないもん。

「いいかげんにしなさい！」

ぴこん！

「いたいよ、つぐみ」

可愛らしい声が響いてアキ兄の頭が叩かれるとアキ兄が振りむいて
幼馴染の雨宮つぐみを見る。

「痛くしてるんだから、当然でしょ！」

「でも、巧が」

「でも、ストもないよ！アキ君」

腰に手を当てて怒るつぐみが言うのアキ兄はまだ納得がいかないよ
うに言おうとすると

支倉ひばりが隣に来て呆れながら言った。

「あ、義姉ちゃんズ降臨した！」

明るい声が聞こえたのでそちらを向くと真希が立っており、笑顔で言った。

こんな騒動を起こしたのに悪気もないのか。

「どうしてこうなったかは予想はついてるけど、今回はやりすぎだよ？」

「うう、ごめんなさい。」

つぐみが呆れながら言うとしゅんとしたように真希が謝る。

ひばりとつぐみに叱られると子犬のように落ち込んでしまう。
それは信頼しているからだろう。

「もう、しない？」

「うん！」

ひばりがきくと真希は笑顔で敬礼して返事をした。

これなら巧も大丈夫だな。

この後、制服に着替えてひばりとつぐみが作った朝食を食べる。

そしてみんなでマンションから出るときに美空さんが出てきて

「ちょっと待って！ひばり分が足りないから」

「ちょ、お母さん!!?」

そう言うのとひばりを抱きしめた。ひばりは当然焦っていたけどほのぼの空間が展開されていた。

しばらくひばりを抱きしめていた美空さんが離れると俺とアキ兄と真希とつぐみと巧を抱きしめてきた。

「みんな可愛い♪どっちがお婿さんになってくれるのかしら」

「お母さん! あたし達まだ高校生だよ!? そんなの早いからね!」

にこにこと笑って言う美空さんにひばりは焦りながら言った
そんなひばりを見ても可愛いと思える俺は重傷かもしれない。

「あはは、相変わらずだね。ひばりのお母さんは」

「でも、楽しい人だから、あたしは好きだよ」

アキ兄は笑顔で言うかつぐみはにこにこと笑って言った。

「みんな、そろそろ行かないと!」

「そうや! こんなことしてる場合やない!」

真希が焦りながら言うのと巧も焦って走り出した。

俺とアキ兄と真希とひばりとつぐみも慌てて追いかける。

ブログ いつものゆるりとした日常（後書き）

いつもの日常を書いてみたけど

大丈夫かな？

第1話（前書き）

今回は真希視点です！！

第1話

真希side

ただいま、学園に向かって全力疾走しています。
今回は吉井家の三つ子の次女が担当したいと思います！！

「はあはあ、みんな。大丈夫ですか？」

「僕は大丈夫だけど」

「俺も大丈夫」

「オレもや」

走りながらあたしがきくとアキ兄とフユ兄と巧くんが答えてくれました。
した。

でも、ひばりちゃんとつぐみちゃんが心配なようです。
当然、あたしも心配ですので振り向いて

「ひばりちゃん、つぐみちゃん。大丈夫ですか？」

「「はあ、ふう…だ、大丈夫！」」

二人は小柄な上に、運動が苦手で体力がないため、すでに限界のようです。

うーん、あたしが二人を瞬間移動で連れていくのもいいでしょうけど、二人は拒みそうですし。

「ひばり、俺の背中に乗りなよ」

「つぐみも！」

あたしが迷っていると、途中でアキ兄とフユ兄が立ち止まり、背中をむけてしゃがみ込みました。
本当によく似てますよね。そういうところも。

「「え、でも」」

「「いいから！」」

戸惑う二人にアキ兄とフユ兄はきっぱりと言いました。
こうまでするとこでも動きませんからね。

ひばりちゃんとつぐみちゃんは、はあ。とため息をつくど、恐る恐るアキ兄とフユ兄におぶさった。
詳しくいうとひばりちゃんはフユ兄の背につぐみちゃんはアキ兄の背におぶさりました。

「真希ちゃんは大丈夫やね」

「当然です！」

うらやましそうに見てはいたら巧君に言われてとっさに答えてしまいました。

うう、あたしのバカ！！

「行けるか、明久に冬久」

「大丈夫」

巧君がアキ兄とフユ兄に聞くと二人はニヤリと笑って答えた。
どこまでも気が合う三人ですね。

そして、ここから再び走りました。

アキ兄はつぐみちゃんを背負ったまま、フユ兄はひばりちゃんを背負ったままで。

あたしと巧君はそのまま走りました。

しばらくして、校門にたどり着くと、人影が見えてきました。

「遅刻だぞ、吉井兄妹、支倉、支倉、山崎」

ドスの効いた声で呼び止められました。

声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていました。

そしてその隣には身長がひばりちゃんやつぐみちゃんより高い、多分145cmの男の子がいました。

その男の子の隣に、144cmの少女がいました。

「おはようございます、鉄じ……西村先生」↓アキ兄

「「おはようございます♪西村先生♪」」↓ひばりちゃん&つぐみちゃん

「おはようございます、アイロンマン先生」↓フユ兄

「おはようございます、西鉄先生♪」↓あたし

「鉄…西先生。おはようございます」↓巧君

アキ兄があだ名でいいかけそうになったので慌てて直して言い、ひばりちゃんをつぐみちゃんは笑顔であいさつしました。

次にフユ兄が完全あだ名であいさつして巧君も思わずあだ名でいいそうになって直すも珍妙な名字になってしまいました。

ちなみに校門前にいたのは、生活指導の鬼。西村教諭です。

ひばりちゃんをつぐみちゃんの状態には触れずに

「お前ら、坂本と同じようにはなるなよ」

「「気をつけます」」

西村先生はアキ兄とフユ兄を見てどこか懇願するように言いました。
なにがあったんですか？

「支倉、今回は残念だったな。理由はあれどルールはルールだからな」

「まあ、仕方ないですね」

そう西村先生は言う。と封筒を取り出してひばりちゃんに渡しました。

「雨宮も残念だったな」

「体調管理ができてなかったですから仕方ないですよ」

西村先生はつぐみちゃんにも封筒を渡して次はあたしの番ですね！

「吉井妹、いくら兄といたいからって…白紙にすることはないだろ」

「先生！ひばりちゃんをつぐみちゃんもいるから白紙なんです！」

頭を押さえてあたしに言う西村先生にきっぱりというといひばりちゃんをつぐみちゃんが呆れた目でこちらを見てました。

なぜゆえ？

「「すいません、西村先生。後で僕等が言っておきますから」」

「許したってください」

なぜか、アキ兄とフユ兄と巧くんが謝っていました。

あれ、どうしてなんででしょうか？

「苦勞するな」

「「「慣れました」」」

どこか同情めいたように西村先生がアキ兄達に言い、封筒を渡しました。

アキ兄とフユ兄と巧くんが封筒を開けようとしていると

「吉井兄に吉井弟に山崎。苦勞してるからといって点数をおろそかにしても意味はないからな」

西村先生はそう言うところちょうど三人が封筒を開けて中身を見るところだった。

吉井明久：Fクラス

吉井冬久：Fクラス

山崎巧：Fクラス

「先生、その隣にいる二人は」

「ああ、月野と芳乃だ。自己紹介していいぞ」

ひばりちゃんが聞くと西村先生は隣にいる二人を見て言いました

「えっと、月野 造です。留年して2－Fクラスに所属することになりました。

ついでに言うとお察処分者です♪これからよろしくお願いしますね、皆さん」

とにこやかな笑顔で言いました。

秀吉君と紅葉くんと似たタイプですね。

「僕は芳乃 朋です。同じく留年して2－Fクラスに所属することになりました。

特別処分者というのものです、これからよろしくお願いね☆」

こっちも笑顔で言った。

確か、彼女はここのシステムも担当していたんじゃないかなかったですよ
うか。

なんだか、楽しくなりそうです☆

朋ちゃん、造くん。仲良くしましょうね！

第1話（後書き）

余談

「中学生じゃないんだね」

「ひばりとつぐみ以外にもいるとは」

「世の中は狭いんやね」

明久と冬久と巧が芳乃と月野の自己紹介を聞いて思っていたとか。

バカテスト 第一問

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希と雨宮つぐみと支倉ひばりの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。

合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、

姫路さんと雨宮さんと支倉さんは引っかけかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いと言われても

吉井冬久の答え

『問題点……マグネシウムを選んだ点』

教師のコメント

そういう問題じゃないんですけど

月野造の答え

『問題点……空气中で加熱すると炎と強い光を発して燃焼するから合金の例……そもそもマグネシウムでは鍋は作れません』

教師のコメント

……まあそうですね。

新条ありすの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です、理数系が得意なだけありますね。

芳乃朋の答え

『合金の例……賢者の石』

教師のコメント
わざとですか？

山崎巧の答え

『問題点 …… 花火するつもりで実行したから
合金の例 …… スチールウール（別の色が楽しめる）』

教師のコメント

花火をするつもりでって、どれだけ物語を膨らませているんですか。
……花火から離れてください。

吉井真希の答え

『問題点……マグネシウムで花火をしたいから！』

教師のコメント

山崎君と同じ答えはやめてください

風宮紅葉の答え

『問題点 マグネシウムは酸化マグネシウム生成のさい激しく発
光して危険。』

合金の例 オレイカルコス』

教師のコメント

遊戯王は先生も好きです。

第2問

巧side

Aクラスの教室前にきたらオレ達は驚愕したんや。

「うわー……大きい教室」↓ひばりちゃん

「こんなに大きい教室あったんだね」↓明久

「ありえねえ」↓冬久

「ひ、広い」↓つぐみちゃん

「すごいですねー」↓真希ちゃん

去年はほとんど来たことのない三階に足を踏み入れると、まず目の前に現れたのは通常の五倍はあろうかという広さを持つ教室やった。

その教壇に立つにはクールで知的な大人の女性の高橋洋子先生が居たんや。

黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイには高橋先生の名前が表示されていた。

「「学年主任の高橋先生か、知的で大人の雰囲気は素敵だなー。」」

ひばりちゃんとつぐみちゃんは知的美人には憧れを抱いてるようや。

その一方で明久はAクラスの設備に目移りをしていたみたいやけど。

「うわっ！席広っ！エアコンにパソコンに、あ！冷蔵庫まであんの！？」

「システムデスクにリクライニングシート…あれじゃ、教室というよりホテルだな」

この設備には冬久も苦笑いを浮かべるしかないようや。

「では、はじめにクラスを代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような白い肌を持つ少女。

物静かな雰囲気を持つ彼女は、その整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていたで。

「……霧島翔子です。よろしく願います」

先ほどと同じようにプラズマディスプレイに大きく名前が表示されたで。

「綺麗な人…」

「羨ましいね」

ひばりとつぐみは霧島を見て羨ましそうにしていたんや。どちらかというと二人も可愛いとオレは思うやけど。

「ひばり？ つぐみ？」

「どうかしたのか？」

明久と冬久は不思議そうにひばりとつぐみに話しかけたで。

真希ちゃんも静かやけど、どないしたんやろ？

気になって隣を見ると携帯でメールを送っていたんや。

誰に送ってるんやろ

「さて、アキ君、フユ君。そろそろ行こう？」

「みんな、揃ってるかもしれないしね」

ひばりとつぐみは元気良く言うと明久と冬久を置いてそそくさと歩き出した。

「あ、うん」

「行くか」

「あ、待ってくださいーい！」

「オレらも行くで！」

明久と冬久は頷くとひばりとつぐみをおいかけに行き、オレと真希ちゃんも慌てて追いかけたんや。

つぐみ達が教室内に入ると

「雄二〜♪」

「ありすは可愛いな」

目に入っただのはいちゃつくバカップル。

坂本雄二と新条ありすだ。今日も甘さ全開のようやね。

教壇で頭を抱えているのはいちゃつくバカップルの幼なじみであり、新条怜次。

ありすちゃんの兄貴や。彼も以外と苦勞していたりするらしいで。

「おはよう、怜次」

「おう、はよ。明久に冬久。支倉と雨宮と真希ちゃんと巧」

明久が怜次に話しかけると怜次は顔をあげてニカッと笑って明久達を見て言ったんや。

「ところで、雄二はいつから？」

「今朝からずっとだ」

明久はふと気になって怜次に聞くとげんなりした表情で怜次は答えた。

どうやら、ラブラブ空気に当てられて疲れているようやった。

「怜次君が教壇に立ってるということは」

「そうだ。俺が代表だ」

つぐみは怜次を見て言うのとニヤリと笑って言うた。

ま、雄二があのもんちゃ狼モードだから無理もないやろう。

「ここって、本当に教室なの？」

「教室じゃなくて、廃屋みたいだな」

ひばりは蜘蛛の巣を見ながら言うのと冬久も周りを見て言う。

このままだと、体調を崩す人が出るのではないかと思うほどだ。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

呆れている奏太達の後ろから覇気のない声が聞こえる。

振り向くとそこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえないおっさんがいた。

「それと、席についてもらえますか？ H Rをはじめますので」

どうやら担任教師が到着したようだ。

「あ、はい」

「了解」

「わかりました」

返事をしてから奏太達は自由に席に座ることにした。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生はお世辞にも綺麗とは言えない黒板に名前を書こうとして、やめた

「あれ、なんで黒板に書かないのかな？」

「ああ、それか。俺が教壇に立った時にみたら、チョークのくずしかなかった」

つぐみが不思議そうにしていると怜次が答えた。

その状態に苦笑いをこぼす、明久とつぐみとひばりと冬久。

「ここは改善を要求したいですね」

「それに関しては同意見や」

真希ちゃんがそう呟いて言うのでオレも同意した。
後で直談判するべきやろうな

バカテスト 第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1) 得意な事でも失敗してしまう事』

『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希・月野造と芳乃朋と支倉ひばりと雨宮つぐみの答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

『(2) 泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

島田美波の答え

『(2) ふんだんにけつたり』

教師のコメント

あなたもですか……

吉井冬久の答え

『(1) 雄二の川流れ』

教師のコメント

あなたは坂本君に恨みでもあるんですか？

山崎巧の答え

『(1) 大丈夫(得意) だと思ひ込んでいる、吉井玲さん(吉井明久の姉)の一般常識。』

明久の姉さんの一般常識は、壊滅的です。神に見放されたんだと思います。

(2) デスピ○サロに対してザ○キを唱えるクリ○ト。

1体に対してザラ○つていうのもポイントです。それに、他メンバーが死のうとも、お転婆姫が掠り傷でも負えば、100%ベ○マ。味方を生き返らせる時はザ○ラル、姫はザ○リク。

優先順位は、

1. ア○ーナ

2. 自分(僧侶? 神父?)

3. 勇者他…

ラスボス戦で爆笑してました。』

教師のコメント

……そこまですか。

先生も○ラを唱える踊り子には、頭を痛めました。

……如何わしい名前に見えたのは、きつと目の錯覚ですね…。

第3問

造side

「必要な物があれば極力自分で調達するようにしてください」

どこからともなく、教室全体からかび臭い独特の空気が漂います。きつと床に敷き詰められている古い畳のせいでしょうね。後で少しだけ学園長の力でも借りましょうかね。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生から指名を受け、廊下側の生徒の一人が立ちあがり名前を告げました。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

男子の制服を着た可愛い女子がそう言いました。

確か、演劇部の期待の新人さで稀代の美少女・性別を超えた人だと言われていましたね。

ツネが興奮気味に言っていましたね。あの後、朋さんの餌食になりましたけど。

真っ白に燃え尽きていたので、なにがあったか聞いたら。ガタガタとツネが怯えていました。

何をしたんですか、朋さん。

「こう見えてワシは男じゃ。」

「え!？」

「そうなの!？」

自分が考え事していると全員にはちゃんと言っておかないといけな
いみたいには彼はいいました。

雨宮さんと支倉さんはこのとんでも発言に驚いていました。

そこまで驚くことなんでしょうか？

それにしても彼とは気が合いそうですね。

「じよ、冗談だよね」

「そ、そうだよ!悪い冗談だよね」

「気持ちわかるが。あいつは男だ」↓怜次

雨宮さんと支倉さんは新条さんのお兄さんに聞くと苦笑いされなが
ら言われてました

もう一回その男子を見るとどうみても女子にしか見えない容姿です。

ちらっと、吉井君を見ると悶えていました。

その弟の冬久君が呆れてみていたのはなぜでしょうか？

山崎君までもなにかを耐えるようにしていたのが見えましたけど。
真希さんに抱きつかれて我に返ってしまいましたね。

「と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

こちらこそよろしく願いします。

おっと、次の人が立ち上がりましたね。
いったい誰でしょうか？

「坂本雪菜です。副代表の坂本雄二とは双子の兄妹ですよ、よろしくお願いします！」

かなり緊張しているみたいです。
気を張りすぎると失敗しまゝあつ

ズデン！

「あううゝ」

どうやら足を滑らしたみたいです。
あ、誰か雪菜さんに近寄っていますね。

「大丈夫？雪ちゃん」

「う、うん。なんとか」

心配そうに声をかけたのはこれまた美少女といわれかねない男子でした。

彼とも気が合いそうな気がします。

確か、彼もツネが興奮気味にしていましたね。
坂本兄妹とは仲が良いという話も聞きます。

「モミジ、心配かけてごめんね？」

「ごめんはいらないよ。僕が好きでしてるんだからね」

申し訳なさそうに雪菜さんが言うのと紅葉くんと呼ばれた男子は笑顔でいつてのけました。
なんだかほのぼのしますね〜。

「雪菜、紅葉」

「あ、雄君！雪ちゃんなら怪我はしてないよ？」

おや、坂本君が近寄ってきたみたいですね。
心配なんですね、やっぱり。

「良かった！雪菜ちゃんに怪我がなくて。もし、してたら…どうしてくれよう」

「あ、あの。わたしなら大丈夫ですから！」

坂本君の隣には新条さんが来て安心したように言い、最後は黒い笑みで笑ってました。
それを見た雪菜さんが慌てて止めるようにいいます。
なんだか大変そうです。

「あります。それは最終手段だ」

「それもそうだね」

坂本君は止めるきないんですか！！？

「それも違う気がするよ！？てか、止めようよ！！」

「雄兄も義姉ちゃんをあおらないで！」

それを聞いた紅葉君と雪菜ちゃんがまた慌てて言いました。
苦労しますね、彼ら。

「次の人の自己紹介してもいいですか？」

「あ、すみません。続けてください」

先生が坂本君達に聞くと紅葉君が苦笑いしながら答えました。

お疲れ様です！

そんなやり取りが終わると次の人が立ちました。

「…………土屋康太」

人のことは言えませんが、ずいぶん小柄で無口な方ですね。Fクラスにしてはおとなしめな方です。

そういえば、彼より背が高い少女と見かけたことがありましたね。
名前は覚えてませんけど。

自分や木下君や紅葉君の写真を撮っていることが多かったのも覚えて
います。

撮ってもおもしろくもないと思うんですけど。

むしろ、一緒にいる彼女さんの写真を撮ればいいでしょうに。

「新条ありますです！得意科目は数学と物理と化学！苦手科目は日本
史です

隣にいる坂本雄二とその妹の雪菜ちゃんと風宮紅葉くんとは幼馴染
の仲です☆」

ガタツガタツ！

おや、誰かが立ち上がった音がしますね。

それにしても、男子だけじゃないんですね。

ちゃんと女性もいてなによりです。

「あ、雄二に手を出したら全員、空に【空間転移】テレポートさせるから、その辺よろしくね♪」

と、笑顔で言って座りました。

それを聞いたらすぐに座る人が続出しましたね。

なぜでしょう？

「島田美波です。海外育ちですけど、日本語は会話できるけど、読み書きは少し苦手です」

帰国子女ですか、読み書きと日本語は血のにじむような努力をしたんでしょうね。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はありません」

笑顔で島田さんが言うところと誰かを見たような気がしました。誰かを探しているんでしょうか？

「秋月終夜です。海外育ちだったけど、幼い頃にこっちに引っ越してきたんで。

日本語もちゃんと話せます。読み書きは得意な方です。後、美波とは幼なじみです」

次に体格の良い男子が立ち上がりました。

彼はサッカー部のレギュラー入りした人ではないでしょうか。運動バカですけど、かなり人気があった気がしますね。

『何！島田の幼馴染だと！！？』

『許せん！肅清してやる！』

『秋月を殺せー！！』

それを聞いた男子が立ち上がり、突然叫びました。

な、なんですか？　いったい彼らになにがあったんですか！！？

「ちょ、なんでお前ら揃って。上履きを構えてんだよ！！？」

あ、秋月君が慌ててますね。

そうですね、いきなりこれだとそうなりますよね。

「みんな、そんなことしたら、ダメだよ！！？」

慌てて雨宮さんが止めると渋々といった感じで皆さんが席につきました。

あるいみで一件落着ですかね？

「支倉ひばりです。家庭科部所属で、趣味はお料理です。特技は…」

一息あけますと、

「『声帯模写だ』」

秋月君の声でしゃべりました。
凄いですね〜♪

「『聞いたばかりの声でも、感情的でなければ、この通りじゃ』」
ついで木下君の声をして。さらに口を開く度に別人の声になっていききました。

「ス……」

呆然とした声を誰かが絞り出しますと、

「「「スゲーーっ！！！！」」」

と、教室は一気に騒然となりました。支倉さんは照れくさそうにしています。

「えっと、雨宮つぐみです。美術部所属で、趣味は料理で特技は……」
こちら一息あけて、

「『ひばりちゃんと同じく声帯模写よ』」

島田さんの声でしゃべってました。

「といっても、ひばりちゃんみたく。できない時もあるけどね」
声を元に戻して雨宮さんが笑いしながら言います。
すると盛大な拍手が巻き起こりました。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

「「「ダアアーリーーン!!」」」」

男らしい野太い声の大合唱が、Fクラスの教室に響き渡りました。流石です、統率力があるにもほどがあります。ノリよ過ぎですよ。

でも、掴みはOKですね!

あれ、どこからかそれは違うんじゃないだろうかという声が聞こえたような。

どこからでしょう?

「吉井冬久です。バカ兄貴とどうように呼んだらぶちのめすから、覚悟しとけよ?

ちなみに、兄貴とは三つ子の兄弟です」

容姿は似たような感じですが、凄みのある迫力で教室内が静かになりました。

冬久君、凄いですね。

「吉井真希です。三つ子の妹です。趣味は料理とアキ兄とフユ兄に手を出した者への報復です。

特技は男性の声と普段の声を使い分けることですかね。」

三つ子ですけど、妹さんは似てないんですね。

明久君と冬久君は似ているようです。

でも、楽しそうな方達です。

した。

あれ、自分はいつから婿入り決定したんですか!!? ?

「山崎巧です。『吉井真希とは将来を誓い合った仲です』って、誰や!!? ?」

朋さんが座ると山崎君が席を立てて無難に自己紹介しようとした……が。

途中で木下君が入り、横やりをいれました。
え、そんなこととしていいんですか! ?

『兄貴、ひどいぜ』

『そうだよ。俺らの女神をとるなんて』

『信じてたのにっ!』

自分が混乱していると他の男子達がそれぞれ落ち込みながら言っていました。

信じちゃいましたよ!!? ?

「風宮紅葉です。みんな誤解してると思うから言うけど、僕は男だからね?」

「「それでもいいっ!!! !」」

「「結婚してくれっ!」」

あ、紅葉君が立ち上がって自己紹介すると即答されました。
哀愁を感じますね、今の彼には。

雪菜ちゃんがおろおろしていますね、どう慰めようか悩んでいるみたいです。

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「寝坊しました」

「えっ？」

自己紹介が終わろうとしているそこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒と男子生徒が現れました。

第3問（後書き）

感想があるかぎり、頑張って書いていきたいと思っています!!

つぐみ「また、見てね」

ひばり「感想、お待ちしてます!」

ありす「次回もちみっこ軍団にうにゃー!!」

つぐみ&ひばり「意味不明だよ!!?」

バカテスト 第三問

問 以下の文を訳しなさい

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.」

姫路瑞希&支倉ひばり&雨宮つぐみの答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはthisだけですか。

吉井明久の答え

「☆●◆▽「♪※×

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

月野造の答え

「これは それ 本しえるふ あの 私の お祖母ちゃん 持っていた 使った れぐらいい」

芳乃朋のコメント

これは一緒に勉強するからがあるね。

大丈夫、手とり足とりで教えてあげるから☆

教師のコメント

なぜ、芳乃さんのコメントがあるのでしょうか？

吉井冬久の答え

『これは私の祖母』

教師のコメント

訳せたのはそれだけですか

吉井真希の答え

これは、私の祖母が愛用していた本棚です。

『アキ兄、それはイタリア語ですよ』

〔教師のコメント〕

正解です。……なんですと！？

第4問

ありすside

「丁度良いですね。みなさんに自己紹介して貰っているところなので、

姫路さんに藤堂くん、あなた達もお願いします」

「あ、はい！ えと、姫路瑞希です。よろしくお願いします……」

「へーい。藤堂辰也だ。よろしく」

わたしやひばりちゃんやつぐみちゃんや造君や朋ちゃん程ではないものの、小柄な身体を縮こまらせ、恥ずかしげに自己紹介する瑞希ちゃん。

白い肌と柔らかそうな長い髪は、いつそ小動物的な保護欲をかき立てるらしいよ。

そして、隣でだるそうにしているのが藤堂君。

成績が良いのに、このクラスに来るなんてどうしたんだろう？

「はい！質問です！」

「あ、は、はい！なんですか？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く瑞希ちゃん。その小動物的な仕草が可愛かったりするらしいね。

「なんで二人は、ここにいますか？」

聞きようによつては失礼決まわりない質問が浴びせられたよ。
でも、これはクラス全員が思っている疑問だから、仕方ないけど。

可憐な彼女の容姿は一目を引くし、なにより彼女の学力は入学して最初のテストで学年2位を記録し、その上位一桁以内に常に名前を残しているほどもんね。

だから、誰もが彼女はAクラスにいるに違いないと思っていた。

「そ、その、ですね……」

緊張した面持ちで体を固くしながら瑞希ちゃんは答える。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしましまして……」

「その付き添いで、振り分け試験の最中に出て行ったんだ」

その言葉を聞き、クラスの皆は『ああ、なるほど』と頷いた。
試験途中での退席は0点扱いとなる。

結果としてFクラスに振り分けられてしまった。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは高難度だったな』

『俺なんか、事故にあった弟が心配で集中できなくて』

『ああ、お前には妄想の弟がいたんだったな』

『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

『異端者だ!』

『嘘です! すんません!』

うん、予想以上にバカばかりだね。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ!」

「一応、宜しくな」

瑞希ちゃんはそう言うのと藤堂くんの手をひいて明久くんと冬久くんと真希ちゃんがいる方に向かった。

「き、緊張しましたあゝ……」

「そんなに緊張することかよ」

卓袱台にふせて言うのと藤堂くんが呆れながら言った。
デリカシーがないなあ!

「辰也くんは緊張しなくてもわたしはするんですっ!」

そう言うのと拗ねたようにそっぽ向いた。

可愛らしい態度をとるよねゝ、だから人気なんだけど☆

「姫路」

そんな時、わたしのお兄ちゃんが声をかけたのです!

「は、はいっ。何ですか？えーっと……」

「新条。新条怜次だ。よろしく頼む」

瑞希ちゃんはお兄ちゃんを見て名前を考えているとお兄ちゃんはすぐに自己紹介をした。

「あ、姫路です。よろしくお願いします。こっちは幼なじみの」

「藤堂辰也だ」

深々と頭を下げて挨拶してから隣にいる藤堂君を紹介する辺り、瑞希ちゃんは礼儀正しいよね！

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「オレも気に」

「あ、それは僕も気になる」

「「あたしも」」

「アタシも！」

お兄ちゃんが問いかけると山崎くんが言おうとしたら被せるように明久くん達が喋った。

「は、はいっ。何ですか？」

吉井君に真希ちゃんに山崎くんに冬久くんにひばりちゃんにつぐみ

ちゃん!？」

「お、久しぶりだな」

緊張のあまり周りが見えてなかった瑞希ちゃんは、会話に参加してきた、六人の幼なじみに驚いていた。今、気づいたのか藤堂君は笑顔で言った。

「久しぶりだね」

「久しぶりやね」

「元気で良かったよ」

「もう、あの時は驚いたんだからね？」

「久しぶり」

明久と山崎くんと真希ちゃんと冬久くんとつぐみちゃんとひばりちゃんはほっとした表情で笑顔で言う。
本当に仲が良いよね♪

「こら、その人達。自己紹介の途中ですよ」

バキッバララっ!!

注意する為に教卓を叩くと見事に壊れました。
それはもうボロボロだったよ。

「……えゝ替えを用意してきます。みなさんはしばらく待っていて下さい」

福原教諭はそう告げると足早に教室から出ていった。

「あ、あははは……」

瑞希ちゃんが苦笑いをしていると、明久がまじめな顔で怜次に声を掛けていた。

「ンわあゝあ。あ？ どうした？ 明久」

怜次は欠伸してたよゝ。

「ここじゃ話にくいから、廊下でいいかな。後、冬久と藤堂と真希と巧も」

「ま、いいだろ」

「わかった」

「仕方ないな」

「らじゃー！」

「おうよ！」

明久は苦笑いを浮かべて言うのと怜次は頷いて言うと呼ばれた皆と一緒に教室を出て行った。

「あいつら、仲良いな」

「雄二は参加しないの？」

「そうですよ」

「僕もそれは気になってた！」

雄二は眺めてから呟いたのでわたしが聞くと雪菜ちゃんと紅葉君も不思議そうに見て言っただけだ。だるいからしか、教えてもらえなかった。

バカテスト 第四問

問・以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin X + 3 \cos X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $???$?
の中から選りなさい

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B - \cos A \sin B$

姫路瑞希と吉井真希の答え

『(1) $X \parallel \pi/6$

(2) $??$ 』

教師のコメント」

『そうですね。角度を $^\circ$ 。』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です』

土屋康太の答え

『(1) $X \parallel$ およそ3』

教師のコメント

『およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数は上げられません』

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

『先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです』

支倉ひばり&雨宮つぐみの答え

『(1) $X \parallel 30^\circ$ 』

教師のコメント

『惜しいですが、ニアミスです。』

象限における角度は『 $^\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてください』

第5問

「ここでいいか？」

「うん、ありがとう。怜次！んで、話なんだけど」

離れた場所に来ると立ち止って怜次が振り返って聞く。

「試召戦争をしたいんだろう？」

「え、なんでわかるの！？」

怜次がニヤリと笑って言うと言明久は驚きながら言った。

まだ、何も言っていないのにわかることにかなり驚いている様子だ。

「わかるさ。お前と冬久は幼なじみの為に教室を変えたってこともな」

「「な、なんでそれを！！？」」

怜次が笑って言うと言明久と冬久は驚きながら叫んだ。

「アキ兄、フユ兄。わかりやすすぎだもん」

「せやな。顔にでてるからすぐにわかるし」

真希と巧は笑って言った。

「話が脱線したが。試召戦争は俺も起こそうと思ってた」

「え、そうなの？もしかして、ありすちゃんの為？」

怜次が言うとも明久は小首を傾げて聞くと怜次は頷いた。

「他の皆を巻き込むことには辛いけど、やるしかないからな」

「申請しても却下とかされそうだもんね」

ふうとため息をついた怜次が言うとも明久が苦笑いして言った。
いくら従兄弟の甥の頼みでも聞いてはくれなさそうなのはわかって
いるのだろう。

「Aクラスの設備も凄かったよね」

「もうホテルみたいだったしな」

真希が言うとも辰也が頷いて言った。

「あ、そろそろ。もどらへん？」

「そうだな、先生が来てるみたいだし」

巧が言うと冬久も頷いて全員で教室に入っていく。
そして、再び自己紹介がはじまる。

「えー、須川亮です。趣味は……」

須川の自己紹介が終わると

「Fクラスの副代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ
後、ありすと雪菜に手を出した奴は俺と紅葉でしばらくからよろしくな」

そう言うのと席についた。

ちゃっかり脅しもつけている所が雄二らしい。

「最後にFクラス代表の新条君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて怜次は立ち上がり、ゆつくりと前に出た。
その雰囲気、Fクラス中の視線が集まる。

「Fクラス代表の新条怜次だ。俺のことは代表か名前で読んでくれ

ればそれでいい」

そう言うところで、少し……間を空けた。間の開け方が上手いやり方だ。

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

カビ臭く、すき間風が通る教室。

古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。

最後に皆を見据えると口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『大アリじゃあっ！！！！！』』』』

教室を揺るがす、魂の叫びだ。

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

怜次は仰々しく同意する。すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

それらをまとめ、引き継ぐように怜次は口を開いた。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

自信たっぷり、素晴らしいほど綺麗な笑顔で、言い放つ。

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

彼、新条怜次は戦争の引き金を引いたのであった。

バカテスト 第五問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希と雨宮つぐみと支倉ひばりと月野造の答え
『粒子』

教師のコメント
『よくできました。』

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
『君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。』

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
『先生もRPGは好きです。』

新条ありすの答え
『闇と対なる』

教師のコメント

『ファンタジーな問題ではありません。
というよりわざと珍回答をしていますか?』

坂本雄二の答え

『眩しいもの』

教師のコメント

『違います。』

坂本雪菜の答え

『サイコパワー』

教師のコメント

『先生も昔は懂れていました。』

秋月終夜の答え

『殺人ビーム』

教師のコメント

『真面目にやってください』

吉井冬久の答え

『心である』

教師のコメント

『周りに合わせて珍回答は止めてください』

吉井真希の答え

『真心である』

教師のコメント

『良いことを言って終わらせようとしないでください』

風宮紅葉の答え

『微粒子』

教師のコメント

『わざとですか？』

第6問

紅葉side

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えないよね

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんがいれば何もいらない』

『真希ちゃんを抱きしめたい』

『雪菜ちゃん、らぶ!』

『ひばりたん、かわゆす』

『つぐみたん、嫁にきて!』

『紅葉ちゃんがいれば幸せだ』

『造ちゃんもいるなら本望だ!』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がっています。
一部おかしなセリフも交じっていたが、気にしないようにしよう。
じゃないと落ち込むし。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかなんだよね。

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されているし。

一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことが出来る。

テストの点数に上限はなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができるというわけ。

そして、科学とオカルトと偶然から生まれた、『試験召喚システム』これは、テストの点数に応じた強さを持つ。

『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が使用可能になる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争………試召戦争と呼ばれる戦い。

その戦争で重要なのがテストの点数だ。AクラスとFクラスの点数は文字道理桁が違うわけで。

正面からやりあっても、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうかは分からないというわけなんだよね。

どうあがいても勝つことなど不可能とは思えないのですが、どうする気なのかな。

だが、怜次はそれを否定してみせるような言葉を発言しました。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せるさ」

圧倒的な戦力差を知りながらも、怜次はそう宣言したのです。

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

『そんなことより、真希ちゃんを愛でたい』

否定的な意見が飛び交うが、また、おかしい意見も出てきたよ。
いったい誰なのかな？

「根拠ならあるさ。このFクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

「要素？」

怜次が自信満々に笑って言うと言雪ちゃんが呟やいた。

「それを今から説明してやるよ」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす怜次。
ゆーくと違い、どこか自信にあふれた感じがする

「おい康太。畳に顔つけて姫路達のスカートを覗いていないで、前
に出てこい」

「……………！！」
(ブンブン)

「ひゃわっ」

「わわっ!？」

怜次に呼ばれた少年、土屋康太は必死に顔と手を横に振って否定した。

瑞希ちゃんと雪ちゃんが慌ててスカートを押さえて離れると、顔についた畳の痕を気にしながら壇上へと歩き出しました。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

「……………!! (ブンブン)」

『ムツツリーニ……………だ……………と?』

『ヤツがそうだというのか? バカな……………』

『だが見ろ。ああまで露骨な覗きの証拠を、未だに隠そうとしているぞ……………』

『ああ……………まったくだな。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

畳の痕を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

「「?..?..?」」

瑞希ちゃんと雪ちゃんだけが、訳が分からないという顔で首を傾げている。

いつまでも純粋な雪ちゃんदैいてね

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだしな」

「えっ！ わ、私がですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

突然に話をふられて慌てる瑞希ちゃん。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『まったくだ。彼女がいれば、ほかに何もいらないな』

『真希たん、かわゆす!!』

『雪菜ちゃん、嫁に来て〜!!』

さきほどから、瑞希や真希ちゃんと雪ちゃんにラブコールを送る輩が増えているんだけど、どうしよう。

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……!!』

『確かアイツ、ここにいる木下優子の……』

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、新条って西多摩で有名な奴で小学生の頃から神童だ
って噂が』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

『なんだよ、Aクラスレベルが3人もいるんじゃないか、このクラス』

いけそうだ、やれそうだという雰囲気は教室内で満ちている。

「それに、Cクラス並の成績を持つ。吉井明久とBクラス並の成績
を持つ冬久だっている

後、月野造と山崎巧もいるしな」

ニヤリと笑ってそう言った

『真希ちゃんの義兄様達のことか!』

『真希ちゃんには劣るけど、成績が途中からあがったんだっけ』

『月野ちゃん、かわゆす!』

『山崎ってエロだと聞いたぞ?』

ざわざわとクラスメイトが騒いだ。

「それに明久達は『観察処分者』だ」

『それって、バカの代名詞じゃなかったか？』

「うーん、傍から言われるとそうなんだけど。ちょっとした騒動でなったわけだから」

「だから、バカの代名詞という理論だけじゃないですよ」

真希ちゃんが笑顔で言う辺り、周りのざわめきが静かになった。

「あの、『観察処分者』というのはどういうものなんですか？」

手をあげて瑞希ちゃんが聞いた。

「具体的には教師共の雑用係だ。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来試験召喚獣は物に触ることが出来ないけど観察処分者である明久と冬久と巧と造のだけは特別使用。

「そうなんですか？それって凄いですね。

試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

瑞希ちゃんは笑顔で言う。

「あはは。そんなたいしたもんじゃないんだよ。

教師の監視下でなければ呼び出せないし、試験召喚獣が受けた負担の何割かがフィードバックして

返ってくるんだよ」

つまり重いものを明久の試験召喚獣に持たせて校舎内を走り回らせればその疲労が明久と冬久に返ってくるわけなんだよね。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、

試験戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないってことだよな』

確かに普通の《観察処分者》ならその通りですがしかし：

「おいおい、さっきも真希が言ってただろ? 明久の成績はCクラス並で冬久はBクラス並だ。

そんな明久と冬久がおいそれと簡単にとられると思うか?

ましてや《観察処分者》なら他の奴よりも召喚獣の扱いに長けている。

《観察処分者》と高得点、この2つがあるから明久と冬久はクラス最強なんだ」

「怜次、あんまり褒めないでよ。照れちゃうよ」

「なんか、むずがゆい」

明久と冬久は照れているね。

「そして、（特別処分者）というのは知っているか？」

「確か、今年の成績はいいのに普段の生活態度が悪い奴にあたえられるという」

「そうだ。吉井真希はその称号を持っている。」

『なんだって!?!』

『高成績でその称号を持つ奴がこのFクラスにいるとは!?!』

ざわざわと騒がしくなる。そもそも特別処分者というのは観察処分者とかかわらないんだけど。

違う点があるというなら、召喚獣に召喚者の意識が乗り移るみたいな感じになるんだ。

あ、本来の肉体も操作可能なんだって。

意識が二つにわかれて召喚獣と本来の肉体にも意識があるというしくみだね。

肉体が無防備だと万が一のこともあるからね

「まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう？」

『当たり前だ!?!』

「ならばペンを執れ！ 出陣の支度を始めるぞ！」

『おぉーっ!?!』

「「お、おー……」」

周りに流されながら瑞希と雪ちゃんが腕を上げます。
僕も頑張ろうかな

第6問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第六問

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希と新条ありすと吉井真希と雨宮つぐみの答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

『簡単でしたかね。』

吉井冬久の答え

『 $C_6H_5NO_2$ 』

教師のコメント

『それはニトロベンゼンの化学式です。

名前にベンゼンが含まれている物を指したわけではありません。』

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

『君は化学をなめていますか。』

吉井明久の答え

『B－E－N－Z－E－N』

教師のコメント

『あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。』

第7問

ひばり side

「ねえ、怜次」

「なんだ、明久」

アキ君が怜次君に声をかけているのが見えた。
どうかしたのかな？

「宣戦布告の使者は誰が行くの？」

「そんなのいいだっしぺの俺が行くんだよ」

アキ君の質問に怜次君はニカッと笑って答えた。

「でも、怜次だけで大丈夫なのか？」

「大丈夫だって、心配すんな」

今度はフユ君が怜次君に近寄って言う。

二人共親友には優しいんだよね。

「俺が行こうか？」

「いや、藤堂は姫路同様に切り札だから、使うわけにもいかない」

藤堂君が言うけど怜次君は首をふり、まっすぐ見つめて言うと言と教室

を出て行く。

多分、Dクラスの方に向かったのだろう。

「自分も行きますよ〜?」

「造が行くなら、僕も!」

怜次君が出た後、月野君と芳乃ちゃんが慌てて怜次君を追いかけて行った。

ひばりside end

造side

無事、宣戦布告が済んで帰る途中

一緒に並んで歩いていたら。

ちっこい子が教室の前にいたんです。

身長は新条君の妹さんと同じくらいでしたね

新条君はその子を見て辛そうにしていました。

ちっこい子は新条君に微笑んでからスタスタと歩いて行きました。

いった誰だったのでしょうか?

「あ、あの。新条君はどうして、試召戦争をしようと思ったんですか?」

「……ありすと雄二の妹の為だな」

「しす…じゃなくて。妹想いだね」

自分は気になっていたことを聞くと新条君はすぐに答えてくれました。

途中、朋さんが小声で何か言っていましたけど。

何んて言ってたのでしょうか？

「後、明久と冬久は妹と島田や姫路。それと支倉と雨宮の為だと思っ
うぜ？」

俺も明久と冬久の気持ちはわかるつもりだしな」

「それはどうしてですか？」

「わかった！ひめちゃん身体が弱いばかりにFクラス入り、
みなちゃんは頑張ってここまで来たし、数学はAクラス入りしても
問題ないもんね
真希ちゃんとひばりんとつぐみんは調子が悪かったからだし。
それを考慮してるんだよ！」

新条君が笑って言うとは自分は不思議そうに聞くと突然、朋さんが声
をあげて呟いた。
なるほど、そう言われると納得できますね。

「レイさんと呼んでもかまいませんか？」

「あ？別にいいけど」

優しいリーダーのレイさんに出会えて自分は嬉しいです。
アキさんとフユさんにも出会えただけでも自分は幸せ者なんですよ
うね

しばらくして教室に戻ると

「あ、お帰り。怜次」

「傷はないようだな」

フユさんとアキさんが笑顔で出迎えてくれました。
どこかホッと安堵したような表情をしていますね。

「でも、怜次に怪我がなくて良かった気がする」

秋月君も安心したように言う。

あの、島田さんから黒いオーラーを感じるんですけど。
気づいてないんですか？

「心配しすぎだろ、お前等」

「だって…よ」

レイさんが苦笑いしながら言う。秋月君が少し悲しそうに言う。

「その話は終わり！とりあえず、屋上でミーティングだ。行くぞ」

レイさんはそう言う。とスタスタと教室を出て屋上に向かいました

造side end

つぐみside

屋上に通じる扉を開けてくぐると、太陽の下にでる。

雲ひとつない青空に、優しい春風が吹いた。

その春の日差しに、はためく瑞希ちゃんのスカートに注視する土屋君以外のメンバーは目を細める。

藤堂君は土屋君の襟首を掴んで何か会話してたけどね

「怜次、宣戦布告はしたんだよね？」

「ああ、今日の午後の開戦予定だ」

怜次君にアキ君が聞くと怜次君は頷いた。

「なら、先にご飯ですね」

月野君が笑顔で言うとな怜次君は頷いてアキ君とフユくんを見る。

「そうなるな。しっかり腹ごしらえしとけよ？ 明久、冬久」

「「わかってるよ」」

アキ君とフユ君は怜次君に言われて苦笑いしながら答えた。

「アキくんとフユくんのお弁当はちゃんとあるよ♪」

ニッコリ笑って笑顔で言うとな土屋君がアキ君を妬ましそうに見る。

「妬ましい……」

「なるほど。今までの弁当は、可愛い幼なじみのお手製か？」

「全部じゃないよ。僕や冬久や真希や巧も作ってるし」

「ほう、ということは明久と冬久と真希と巧もお弁当は作れるということじゃな」

秀吉君はアキ君とフユ君と真希ちゃんを見て言う。

アキ君達にゲームはあまり買わせないようにしている為、6人で日程を決めて弁当と食事当番を決めているのだ。

「わたしもお弁当を作りたいのですが、許可をもらってないので作れないんです」

「え？ そうなの？」

しゅんと落ち込んだように瑞希ちゃんが言う。島田さんが不思議そうに聞いてきた。

「当然だろ。料理に薬品をいれるんだからな。今は舌がしびれるくらいだけど」

「マジ？」

藤堂君は呆れながらそう言う。と怜次君が苦笑いしながらアキ君に尋ねた。

「うん、一度だけ、姫路さんのお弁当食べたら、病院に入院してたんだ」

「それから、瑞希ちゃんにはちゃんとしたお弁当が作れるまでは禁止にしたんだよ」

あたしはため息を吐きながら言うのと怜次君と雄二君と秀吉君と土屋君と島田さんは青ざめていた。

「ということはまた練習するんだよね」

「うん、まだまだ、だからね。」

「ウチも参加していい？」

「僕も！」

「いいよ？みんなで料理教室しよう♪」

ひばりちゃんは笑顔で言うのと島田さんと瑞希ちゃんと真希ちゃんも嬉しそうに笑った。

「明日が楽しみだね」

「うむ、そうじゃのう」

「明日はごちそうだな」

「楽しみや」

男性陣も嬉しそうに笑っている。

「この件は後にして試召戦争の話に戻ろう」

この場にいる全員は雄二君を見る。
ただ、ありすちゃんを膝枕をしての会話はやめた方がいいよ

「怜次。一つ、気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？」

段階を踏むならEクラス。勝負にでるなら直接Aクラスじゃろう？」

「そういえば確かにそうですね」

「まあな。当然考えあつてのことだ」

怜次君が鷹揚にうなづく。

「どんな考えなんですか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。

戦うまでもない相手だからだ」

「え？ でも、クラスは僕らより上だよ？」

「振り分け試験時点ではそうだったかもしれない。だが、実際はちがう。

明久、いまおまえの目の前にいるメンツをよく見ろ」

「えーっと……」

アキ君は雄二君に言われた通りに周りのメンバーを見る。

「美少女が4人と美幼女が4人とバカが1人とムツツリが1人とドアホが一人いるね」

「「酷いよ!アキくん!あたし達はそんなにちっちゃくないよ!?!」」

「アキさん、自分は男ですよ!?!」

「誰が美少女だと!?!」

「落ち着いて、つぐみにひばり!てか、なんで雄二が美少女に反応するのさ!?!」

しかも、造まで」

「……………(ポツ)」

「俺が美少女やて!?!」

「ムツツリー二や巧まで!?!どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!」

と、アキ君が慌てていると朋ちゃんがキツパリと言った。

「坂本はバカで美波と瑞希と僕と秀吉が美少女で土屋はムツツリだよ造は男の娘☆」

シーン

「そ、そうか」

「ありがとう。芳乃さん」

「いえいえ☆」

笑顔で笑っていた。

「ま、まあ、要するにだ。姫路に問題がない以上、正面からやりあってもEクラスには勝てる。

俺たちの目標は、あくまでもAクラス。Eクラスとやり合っても、得るものは無い。

だったらやる必要はないだろ？」

「Dクラスとやり合う事に意味があるということ？」

「その通りだ。ま、初陣でもあるし。派手にやって今後の景気づけにしたいからな。

それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に役立つプロセスだしな」

「あ、あの！」

すると、不意に瑞希が大きな声をあげた。

「ん？　なんだ姫路」

「新条君たちは、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。じつはありすや雪菜や姫路や島田や雨宮と支倉の

為だな」

「そうなんですか」

瑞希ちゃんが不思議そうに聞くと怜次君は笑顔で答えた。

「さっきの話、Dクラスに勝てなきゃ意味がないと思うけど？」

「勝つんだよ。俺達みんなの力で」

アキ君の心配を笑い飛ばしてメンバーを見渡す。

「おまえ等が俺に協力してくれれば、必ず勝てる」

怜次君は力強い言葉で言った。

「いいか、おまえら。ウチのクラスは……最強だ」

根拠のない言葉だが、なぜかその気になるという雄二君の言葉にはそんな力があつた。

「いいわね……面白そうじゃない！」

「なんかやれそうだって気になるね」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「頑張るぞ！」

「……………（グッ）」

「頑張ろうね！みんな！」

「が、頑張りますっ！！」

「自分も頑張ります！」

そう皆がいい、士気が上がる。

「そうか。それじゃ、作戦を説明する」

そう言い、Fクラスの勝つ為の作戦が説明される。

第7問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第七問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希&吉井真希の答え

『good—better—best
bad—worse—worst』

教師のコメント

『その通りです。』

吉井明久&吉井冬久の答え

『good—gooder—goodest』

教師のコメント

『まともな間違え方で先生驚いています。』

goodやbadの比較級と最上級は語尾に—erや—estをつ
けるだけではダメです。

覚えておきましょう。』

土屋康太の答え

『bad—butter—bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

坂本雪菜の答え

『good—better—best』

教師のコメント

『一つはできましたがもう一つは思いつかなかったみたいです』

新条ありすの答え

『good』

英語なんかできなくて大丈夫です！

教師のコメント

『いや、必要になりますからね！？』

第8問（前書き）

今回は終夜視点です！

第8問

終夜side

「アキ、冬久、終夜、真希！ 木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らして走ってきたのは俺の幼なじみである島田美波。

やっぱり、可愛いよな……美波

「おーい！終夜、ぼんやりと島田さんを見つめない！」

「そうだぞ、あまりにはずかしすぎで俺達の後ろに隠れたじゃないか」

「せーかくにはわたしと巧君の後ろですけどね」

明久に言われてはっと我にかえると本当に恥ずかしそうに赤面した美波が真希と巧の後ろにいた。

「わ、悪い！」

「べ、別にいいけどね」

俺が慌てて謝るとそっぽ向いて美波が呟いた。
だから、その反応が可愛すぎるんだって！！

「どう思う、アキ兄」

「いや、見ていてほのぼする展開だね」

「終夜も男なら押し倒すんや!」

「いや、それはどうかと思いますよ。巧君」

冬久がニヤニヤと笑って言う。明久もニヤニヤと笑って言い、巧ま
でニヤニヤ笑いになっていた。

真希が呆れながらツツコミをいれたけどな
どこからハリセンを出したんだろうか?

「そ、それよりも! 試召戦争に集中しないと!」

美波があわあわと慌てて明久達に言う。

ありがとう、美波。本当に優しいな

「美波ちゃんがそう言ってるんですから、作戦開始ですよ?」

真希も美波を後押しするように言う。

前線では、秀吉率いるFクラス先遣隊が戦端を開いており、俺たち
からも、

展開されたフィールドに召喚獣が召喚される様が見えた。

俺達は渡り廊下とFクラス中間点、Eクラス近辺に中堅部隊を展開
している。

と、鉄人の姿が見えた。

『戦死者は補習だ!』

『ヒ、ヒイツ?! て、鉄人?! イ、イヤだ! 補習室だけはっ
!』

鉄人の出現に生徒Aは怯えていた。

『黙れ! 負け犬が!』

戦死して捕虜になった者は、今日の戦争が終了するまで、補習室で特別講義を受けさせてやる!

終戦まで何時間かかるかはわからんが、たっぷり指導してやるぞ?』

『あ、あんな拷問、耐えられるわけが……』

鉄人が凄く楽しそうに言うともまだ怯えたままの生徒Aが青ざめたままの表情で言う。

『拷問? そんなことはせん』

そう言って鉄人がニヤリと笑う。

『補習が終わる頃には、趣味は勉強。尊敬する人物は二宮金次郎という具合に、

理想的な生徒に改ぞ……仕立てあげてやろう。

楽しみにするといい』

『あ、悪魔だ! だ、誰か助け……』

そう言って鉄人は生徒Aを担ぎあげて歩いて行く。

生徒Aは助けを求めるが誰も助けにはいなかった。

てか、鉄人はそれは洗脳になってるぞ。

すると明久の表情が真剣になった。

「総員退避なんて言うなよ？」

「や、やだな。終夜、僕が言うワケないじゃない♪」

俺が先制して言うとな星なのか焦った明久が居た。

これには美波と真希も呆れていた。

巧と冬久は遠くを見ていた。

ああ、こいつらも同じ考えだったか。

「終夜の言う通りよ。アキ、あなたまがりなりにも中堅部隊の部隊長でしょ？」

真っ先に臆病風に吹かれてどうするのよ。

ウチら中堅部隊は、前線の木下たちの援護が任務なのよ？

消耗した木下たちが補給を終えるまでは、ウチ達が前線を支えなきゃならない。

そしてウチ達の背後には、もう本陣であるFクラス教室しかないのよ」

腰に手を当てて明久に説教する美波。

カメラが欲しいって、何を考えてるんだ！俺！！？

それを聞いて明久はハッとなる。

「島田さんゴメン。僕たちが逃げだしたら、戦線が崩壊してイッキに押しこまれちゃう。」

そうになったら絶望的だ」

「ええ。だからウチ達は頑張らないといけないの」

明久がまっすぐ見つめて言うのと美波は笑顔で答えた。

「わかったよ、島田さん。とにかく今は、勝利することを目指そう」

「わかったわ。」

明久が美波に言うのと美波は頷いた。

「大丈夫ですよ、アキ兄に皆。

一対一ではかなわないでしょうけど、多対一に持ち込めば勝機はあるはずですよ」

真希は笑顔で安心させるように言う。

「そうだね、やろう！」

「頑張ろうぜ！」

「俺達の力を見せるんや！」

「吉井隊長、前衛部隊が後退を開始したぞ」

明久と冬久と巧が大声で叫んだ。

すると次の伝令に明久と巧と冬久と美波の頬を、冷や汗が伝う。

「終夜……ウチらガンバったわよね」

俺は、『えっ?!』という文字のような顔になった。

「……だな。くやしいけどここまでのようだ」

だけど二秒で同調した。

「いきなり諦めないでください!」

スパパン!!

真希のハリセンで俺と美波は叩かれていた。

「あれ、横田やん。どないした?」

「兄貴、これ坂本副代表からの伝令です」

巧はいつのまにかいた横田を見て言う。横田は手紙を見ながら言う。

「『逃げたらコロス』」

「全員突撃しろぉーっ!」

既に明久は叫びながら戦場に向かって全力ダッシュをしていた。
慌てて冬久と巧と真希と俺も追いかける。

すると、前方から此方に向かって走って来る秀吉を発見した。

「明久と冬久と山崎と終夜、援護に来てくれたんじゃない!」

どこかほっとした感じの秀吉が俺達に言う。

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れておるものの、点数はかなり厳しい所まで削られてしまったわい」

明久が聞くと秀吉は頷いて困ったように言う。

「それじゃあ、早いところ補給を受けてきた方がいい。お前等が戻るまで俺達が何とかしよう」

冬久がそう言うのと秀吉は頷いて

「そうじゃな。せめて一、二教科だけでも受けてくるとしよう。」

言うや否や、秀吉と前線部隊のクラスメイト達が教室に向かって走って行った。

「さて、気合いれて行こうか。アキ兄」

「そうだね、冬久。巧と終夜と真希と島田さんも準備は良い？」

冬久が言うのと明久も頷いて俺と巧を見て聞いた。

「もちろんや」

「同じく」

「はいです！」

「ええ！」

巧と俺と真希と美波は笑顔で頷いた。

俺達は中堅部隊を連れて前線へと走って行った。

「アキ、冬久、終夜、山崎、真希。見て！」

俺達の隣を走る美波が叫ぶ。

「五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

見ると二年生化学担当の五十嵐、布施両教諭が渡り廊下にいた。どうやら、Dクラスは短期決戦を挑んで来た様だ。

結構、厄介だな。

新条の妹がいたらなんとかなったはずなのに

「島田さん、冬久、終夜、巧、真希。化学に自信は？」

「アキ兄、俺にあるわけないだろ？」

「俺か？130くらいだな」

「一応100はあるで」

「私は自信ありますよ？」

「全くなし。60点台常連よ」

明久が聞くとたそがれたように冬久が言い、俺もスグに答えて巧はニヤリと笑って言う。

真希と美波もすぐに答えた。

「それでも厳しいかな、五十嵐先生と布施先生には近付かないよう注意しながら

総合科目の学年主任の所に行こう」

明久が困ったように言う。と次の指示をした。

俺と巧と真希で行動してもいいが、それでもキツイことには変わらないもんな。

「「高橋先生だな？了解だ！」」

「同じく了解よ」

「俺も了解や」

「了解しました！」

俺と冬久の言葉が被りながら言い、美波と巧と真希も頷いて言う。

「あっ、そこにいるのはもしや、Fクラスの美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来て下さい！」

「み、美春！？くっ、ぬかったわ」

「やりおるな」

ツインドリルの髪型の少女を見て美波が迂闊そうに言うとかがノリにのって言う。

「何者なんですか、二人共!？」

あ、真希がハリセンでツツコミをいれてる。

「行きます! サモン 試獣召喚!」

美春と呼ばれた少女の足下に、幾何学的な魔法陣が現れた。

そして、召喚獣が姿を見せる。

その姿は、デフォルメされた本人そっくりだ。

なぜか、巧に怯えているように見える。

「サモン 試獣召喚!」

美波もつづいて召喚する。足元に幾何学的な魔方陣が現れた。

そして召喚獣が姿を見せる。

その姿はデフォルメされた本人そっくりだ

武器はサーベル。

「……お姉さまに捨てられて幾数日、美春は、美春はこの瞬間を待ち続けていました!」

「もう! いい加減うちのことは諦めなさい!」

その言葉とともに、美波の召喚獣が打ち掛かる。

「イヤです! お姉さまは、いつまでも……いつまでも、美春のお

姉さまなんです！」

繰り出された一撃を、美春の召喚獣が受け止める。

「来ないで！　ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！　お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

どう見ても美波は本気で嫌がっているはずなのだが、美春にはそう見えないらしい。

「たあああっ！」

「やあああっ！」

すさまじい気迫に周囲の戦闘が一時的に止まる。

「て、やあ」

「負けません！」

何合かの打ち合いがあったが、その全てで美波の召喚獣は打ち負ける。

「まずいな、島田の召喚獣と相手の召喚獣の地力が違いすぎる」

冬久が戦況を見て呟く。

「島田さん！　点数が上の相手に、正面から打ち合っちゃダメだ！」

明久も必死にアドバイスするが、

「そんな、こと、言われても、細かい、動作は、できない、のよ、きゅっ!？」

力負けした美波の召喚獣が武器を弾かれる。

「ここまでですっ！」

そのまま倒れた美波の召喚獣に、美春の召喚獣が剣を突きつけた。

二人の召喚獣の頭上に94と53が表示されている。当然、美春が94で美波が53だ。

「さ、お姉さま、勝負はつきました」

「うう、ほ、補習室は嫌あつ！」

「補習室? ……フツ。そんな無粋な場所へお姉さまを送り込んだりしませんわ。

さあ、参りましょう」

そう言うと、美春は美波の手を取った。

「な、なにを……」

「この時間ならベッドも空いてますわ」

感極まったように笑う美春と対照的に、美波の顔は真っ青になった。

「ひっ！ しゅ、終夜、フォ、フォローを……」

「邪魔をすれば殺します。誰であろうとも……」

美波は俺に助けを求めているようだ。

だが、美春と呼ばれた少女は俺に殺気をだしている。
勘弁してくれよ！？

「だが、行かないとダメだよな。」

俺が呟いていると

「邪魔者は！ コロスッ！！」

叫びとともに、俺に襲いかかる。

「うお、やば！ 試獣^{サモン}召喚！」

俺が召喚獣を召喚して相手の武器を死神みたいな鎌で防ぐとカウンタ―で攻撃した。

ちなみに俺の召喚獣もデフォルメされた俺で装備はグローランサーのウェインに似てる。

『Fクラス 秋月終夜 化学 130点 VS Dクラス 清水美春 化学 0点』

その次に点数も表示された。

「そ、そんな……」

召喚獣を一撃で倒された美春は、呆然と立ち尽くした。

「戦死者は、補習!!」

「ハッ?!」

美春は即座に逃げたそうとしたが、あっさり鉄人に捕まる。

「お姉さま! 美春は諦めませんからね! 無事に卒業できると思わないでくだ……」

それは想い人への言葉としてはいかなものだろう。
その場に残された全員がそんな顔をしていた。

第8問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第八問

問 江戸時代（1）をした女性の身代わりになる職業。その職業の名前は（2）である。

（ ）の中身を埋めなさい。

姫路瑞希&吉井真希の答え

（1）おなら

（2）科負比丘尼^{とがおいびくに}

教師のコメント

正解です。

（1）おなら。 （2）は、屁負比丘尼^{へおいびくに}あるいは、科負比丘尼^{とがおいびくに}と言います。

人前で放屁するのは良くない、特に女性だとはしたくない事とされてきたんです。身分の高い家には、その家の妻女や娘に付き添って、放屁や過失などを自分の責めとして自分がしたかのようにして恥かきの代りをした役のものがいた。その者の事を屁負比丘尼^{へおいびくに}というんですね。

土屋康太の答え

(1) おな(×) マス(×)——自慰

(2) 女優

教師のコメント

どういう意図でその答えを導き出したかは解りませんが、18禁であらうことは容易に想像できます。
そういうものは、控えてくださいね。

生活指導の西村先生に報告をしておきました。

山崎巧の答え

(1) 借金

(2) 連帯保証人
そしてオレは、——

教師のコメント

そしてあなたは、取り立て屋ですか。

木下秀吉の答え

(1) 粗相 (姉上)

(2) 下僕^{ワシ}

教師のコメント

姉上…お姉さんの優子さんでしょうか？

姉弟ですよね！？

坂本雄二の答え

(1) 愛 (新条ありす)

(2) 奴隷 (俺)

教師のコメント

愛の奴隷…坂本くん、頑張ってください。

吉井明久&吉井冬久の答え

(1) もよ

(2) ムダな身代わり

教師のコメント

便は、自分で行かないと意味ないです。

解ってて代わるんですか!?

島田美波の答え

(1) 小ぶりの胸

(2) パッド

教師のコメント

誰も身代わりになんてなれま……

：確かに代わりになります。答えがかなり力強くかかれていますね。
あなたにとって大切な事——（先生は諸事情により、途中退席しました）

第9問

朋side

うゝ暇だよ。

開戦の後は、新条君の指令で姫ちゃんと藤堂君と造と一緒に補充試験を受けつつ

本陣で待機させられてるんだよ。

そう言えば、今日は召喚するなって僕と造は学園長に言われてたね。あー、つまんない！

「姫路さん体調は大丈夫ですか？根を詰め過ぎると後々バテちゃいますよ？」

「あっ、はい。平気です。皆さん一生懸命やってくださってますから私も頑張らないと！」

造が姫ちゃんに尋ねると笑顔で返答がきました。

「良い意気込みだね♪でも、無理したら藤堂君が心配するよ？」

僕が笑顔で言うのと隣にいた藤堂君がこけた。
なんで？

「そっ、そうですか（ポツ）」

あれ、藤堂君をちらちらを見ながらトリップしてる。
姫ちゃん、本当に大丈夫かな？

「あの、レイさん？自分達は本当に前線に出なくていいのでしょうか？」

補充試験を一通り受けつつ休憩をいれてると、造が新条君に近寄って聞きました。

「ああ、造は確かに一度顔をだしたが。戦力のことはまだ知られてないだろう？」

姫路と藤堂と芳乃と造がAクラスの上位成績者なんてことは知らないだろうからな」

怜次君は僕と造を見てニヤリと笑って言う。

あれ、いったけ？

僕と造が元Aクラスだって。

「悪いが、試召戦争の為に康太に調べさせた。

だが、お前達の留年の理由や観察処分者になった理由までは調べる気はないから、安心してくれ」

苦笑いして坂本君が言う。

膝にはうつとりしたありすが居るね。

作戦中に何してるのさ、本当に。

「ありがとうございます。坂本く、いや。ゆーさん♪
自分達、協力しますから！」

「ありがとうね！同じく強力するよ！」

造は笑顔で言うので僕も笑顔でお礼を言った。

しばらくしてまた、補充試験を受けていると

「坂本！吉井からの伝言だ！」

「なんだ？脱走ならしばらくと言っておけ。主にチョキでな」

須川君がいきなり入ってきてそう言ったら坂本君がノートにメモをしなう。

「先生たちに偽情報を流してくれ、と」

怜次君がそれを聞いて考え込んでいると坂本君がメモを須川君に渡した。

なんだろう、造に関してのエマージェンシーを感じるよ

「わかった。かならず成功させよう」

そう言って須川君が出て行った。

《ピンポンパンポーン》

あ、校内放送だ。

「雄二、お前な」

「いいだろ、別に」

怜次君が呆れながら言うのと坂本君は笑ってありすちゃんの頭を撫でている。

《高橋先生、遠藤先生、船越先生、佐藤先生》

四人！？なんか嫌な予感しか感じないよ！！

《月野造君と芳乃さんが校舎裏で待っています》

なんてことを言うの！？

佐藤先生は男の先生で高橋先生や遠藤先生並にあるいみしいキャラなんだよ！？

《自分の想いを打ち明けたいのですぐに来てください》

どんな放送なのさ！！

やめてー、恥ずかしすぎるー！

『『月野くん、今行きますねっ！！！！』』』

『芳乃さん、今行くからなっ！』

えー、なんで釣れるの！？

こんなことってないよー！！

「ゆーさん！？自分達を売ったのですか？」

「いやいや、協力してくれるんだろ？造。それより逃げなくてもいいのか？」

造が言うと坂本君はニヤニヤと笑って答えた。

怜次君を見るとものすごく申し訳なさそうにしている。

「と、とにかく逃げるよ！造！」

「そ、そうですね。朋さん！」

僕と造は急いで教室から出て行った。

いつか、復讐してやる……！！

朋side end

真希side

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻ってこない！ やられたか！？」

盛り上がった士気のまま戦うことしばし、残念ながら戦力差の影響が現れはじめてきましたね。

工藤君と森川君が戦死（補習室送り）。

これで、18人いたアキ兄の部隊は残りわずか5人になってしまいました。そろそろ限界ですか。

「明久、冬久、支倉、雨宮、巧、終夜、真希！あと少し持ちこたえろ！」

撤退を考え始めていると、そんな激が飛んできました。

辺りを見回してみると、わたし達よりはるか後方に雄二と雪菜ちゃ

んとありすがありました。
というか、雪菜ちゃんを背負っているのにあんな遠くからでもはつきりと声が届くなんて。

「援軍だ！ 合流される前に吉井達を全滅させろ！ 面倒な事になるぞ！」

Dクラス前線部隊指揮官の塚本君の指示が聞こえます。
合流前に全滅させられたら、アキ兄達は全員補習室行きです

「西村雄一郎、戦死！」

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います！」

「負けるか！ Fクラス田中も行きます」

残り4人。 田中君も捕まりましたか

『化学 Dクラス・鈴木一郎 92点 VS 67点 田中明・Fクラス』

田中君の召喚獣も刀の餌食です。 これで残り3人ですね。

「どどん行くぞおっ！」

『化学 Dクラス・鈴木一郎 25点 VS 66点 柴崎攻・F
クラス』

『化学 Dクラス・笹島圭吾 99点 VS 41点 柴崎攻・F
クラス』

鈴木君は撃破できましたが、疲労した柴崎君が笹島君にやられてしまいました。

あ、笹島君が明久に向かってきてます。

「吉井明久！ その首級くびもらった！」

「さません！ 試獣サモン召喚」

わたしが言うのと召喚した。デフォルメした姿で格好は天使みたいな格好でした。

ただ、武器は釘バットというものでしたけどね。

「くそ！」

『Fクラス 吉井真希 化学 320点』

VS

『Dクラス 笹島圭吾 化学 58点』

これで一撃で笹島君は倒されましたね。
さて、アキ兄達は？

「ああっ！ 霧島さんのスカートが捲れているっ！」

『何いっ!?!?』

アキ兄……何が本当にしたいんですか？

というか、才色兼備の彼女のファンは多いようですね。

Fクラスの男子もそうですが、Dクラスの男子とDクラスの女子まで振り返ってますよ

ガシヤアアアアン！

アキ兄は皆さんが後ろを向いている隙に窓を割りました

『な、何だ!?!? 何事だ!?!?』

突然の出来事にその場の全員の注意が更に逸れます

「うわっ！ 佐川君！ そんなものをどうする気だよ！」

佐川君って誰でしたっけ？

というかいけないような気がするんですが。

そうアキ兄が言うのと消火器の安全弁を引き抜きました。

プシャアアッ！

「う、うわっ！ 何だ！？」

「ぺっぺっ！ こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

「佐川君、キミは何てことを！」

「佐川！ 何て卑怯な奴なんだ！」

「そうよ、そうよ！ 清々堂々と戦いなさいよ」

バレてないんですか！？ 実在してないのに！！

アキ兄が消火器を天井のスプリンクラー目掛け、おもいつきりブン投げて命中させると

しゅわああああー

スプリングラーの水滴が辺りを舞う粉を落とし始めました

「待たせたな、吉井！ 五十嵐先生！ Fクラス、近藤吉宗が行きます！」

再びクリアーになった視界で勝負を申し込んだのは……雄二君率いるFクラス本隊の一人、近藤君

「サモン試獣召喚！」

『化学 Dクラス・中野健太 43点 VS 91点 近藤吉宗・Fクラス』

「くっ！ ここは退くぞ！ 全員遅れるな！」

「深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

「皆さんお疲れさまです！」

雄二は皆に指示を飛ばしていました。

雪菜ちゃんは笑顔でみんなに言うとなんだかほんわかオーラーが流

れました。

第9問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第九問

問 江戸時代、農民が武士になるには、どうすればいいか答えなさい。

姫路瑞希&吉井真希&芳乃朋&月野造の答え

『身分をお金で買う』

教師のコメント

『正解です。当時階級をお金で買うことができたんです。金額にして、だいたい20両〜500両。今の値段にして数百万〜数億円と言われています。』

木下秀吉の答え

『一式準備』

教師のコメント

『武士セットですか？ 用意してもなれません。』

坂本雄二&新条ありすの答え

『楊枝を啜える』

教師のコメント

『武士食わねど高楊枝』あれはことわざです。啜えたからといって、武士にはなれません。

吉井明久&吉井冬久の答え

『土下座』

教師のコメント

それでなれても、嬉しくないと思います。

山崎巧の答え

『一揆』

教師のコメント

『暴動を起こした農民です。』

島田美波の答え

『筋トレ』

教師のコメント

『マツチヨにしかありません。』

秋月終夜の答え

『マラソン』

教師のコメント

マラソンランナーと勘違いしてませんか？

土屋康太の答え

『形振り構わず神頼み』

教師のコメント

『神頼みで武士になれるのなら、神になった人がどれほどいるか：私も神になっていたでしょう。それよりも、他にすることなかったんでしょか？』

第10問（前書き）

楽しんでます様のエレノアさんをちょっと出してみました。

第10問

冬久side

「明久に冬久、よくやったな」

「「それじゃあ」」

「ああ、補給組はだいぶ回復できたぞ」

「「良かった」」

「「安心したよ」」

怜次はニヤリと笑って言う。僕とアキ兄は安心して笑いあう。
つぐみとひばりも安心して呟いた

「あれ、朋ちゃんと月野君は？」

「そういえば、いないね」

ひばりが周りを見て言う。つぐみも気になるのか周りを見て呟いた。
確かにおかしい。喜んでお疲れ様とかあの二人ならいいそうなのにな。

「あの放送は聞いたでしょ？」

「あの放送って」

「まさか：そんなわけないですよね!？」

ありすがにここにこ笑顔で言うといひばりが考え込むと真希がなにかに気づいたのか叫んだ。

「その通りだ。あの放送で二人は逃げる為にここから出て行ったのさ」

「「坂本君、どうしてそんな罫を（汗）」」

雄二がにやにやと笑って言うといひばりとつぐみは呆れていた。

「協力すると言ってたからな」

「やからって、あんな噂せんでもええと思うんやけど?」

雄二が笑って言うときさきほどまで眠っていた、エレノアさんが呆れたように言う。

ま、僕も同意見だけだね。

「よし、お前等!そろそろDクラス代表の首級を獲りに行くぞ!雄二も出るから安心しろ! みんな続けえっ!」

『おおー!!!』

そんな会話をしてると怜次が鼓舞するようにみんなに伝える。さ、続きを頑張らないとな。いよいよ、最終局面に来了。今なら、帰宅する生徒もいるし、上手く倒せるだろう。

「下校している連中に上手く溶け込め！ 取り囲んで多対1の状況を作るんだ！」

雄二の指令が戦場に響く。

「そっちから、周り込め！ 俺はこいつに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を！」

「日本史で……！」

Dクラスの連中を囲んで、Fクラスのメンバーは倒していく。

冬久side end

造side

何とか撒きましたかね……？ 酷い目に遭いました。

あそこまで鬼気迫る鬼ごっこもそうそうないでしょう。戻ったらゆーさんにお仕置きです。

3時間正座で説教させます。

っと、気づけばちょうどDクラスと我らがFクラスの戦場まで来てましたか。

少し隠れて様子を見ましょう。なるべく見つかるなど言われていますしね。

よく見るとアキさん達の部隊がやっていますね。戦況は良いようですね。

もしかすると自分と朋さんの出番はいらないかもしれませんがね。あ、フユくんの後ろから敵が。

アキさん達は気づいていないようですし、行きましょう！

「もらった！」

「させません！Fクラス月野造、召喚します！試獣^{サモン}召喚！」

「同じく！ Fクラス芳乃朋、召喚するよ！ 試獣^{サモン}召喚！」

「造！？ 何でここに？」

「朋ちゃんまで！？」

おわっ！？め、目眩がします。

そいや、召喚は控えろって言われてましたね。まあ仕方ありませんが、これは予想以上です。

ですが召喚獣はちゃんと現れましたね。よかったよかった。

朋さんの方も無事召喚できたみたいですな。

自分と朋さんのデフォルメされた分身と共に、今朝は見せなかった装備と服装です。

ふむ、設定の変更自体は終わっているみたいですな。

見た目は魔法使いを思わせる黒っぽい服装です。

ちなみに朋さんも魔法使いの姿です、自分とは色違いですけど。

てかまんま魔法使いですね。定番の帽子をかぶってますし。そして戦うための自分達の自慢の武器、それに皆さん驚いていますね。

何てったって……

「「「ほ、ほうき!?!」」」

ほら、案の定驚いています。

「造に芳乃さん、どうしてここにいるのか知らないけど、何それ？」

「フユさん、これ知らないんですか？」

学園の庭から神社の境内まで、どこでも使えるこの武器の存在を」

自分は自信満々に笑顔で言いました。

「いや、わかるから!武器じゃないでしょ？」

「というかやっぱりそれが造と芳乃の武器なの!?!」

「はいです。正真正銘、これが自分の武器ですよ?」

「にはは♪もちろん、僕のもそうだよ♪」

アキさんがツツコミをいれて言うけどこれが自分達の武器なのですよ。

「あつ、わかった仕込み刀とかでしょ?」

「いいえ?そんなもの付いてたら危ないじゃないませんか?」

「そうだよ、痛いじゃん!」

フユさんが言うけど自分達是否定します。

「ただの箒!? 僕の木刀の方が強く見えるよ!」?

皆さん哑然としてますね。まあ最初に見たときは自分も流石に驚きましたか…

「……やっぱり、FクラスはFクラスよね?」

「そうだな。吉井兄と吉井弟にしろこの子達にしろやっぱり雑魚だ」

「そういえばその子達だけ? 校舎裏で待ってる小学生達は?」

待って!? 小学生は流石に言い過ぎですよね! あなた方は自分達をどんなふうに見ているのですか?

「ですが、見た目に惑わされると痛い目に遭いますよ…」

「そうだよ! 怒ると怖いんだからね!」

「」「」「なっ!」?」「」「」

《Fクラス 月野造 化学 304点 & Fクラス 芳乃朋 化学 302点》

ようやく出てきた点数に皆さん驚いてますね。

むう、本当なら化学はもう少し点は上のハズですが
ゆーさんのおかげで途中までしか出来なかったじゃありませんか……

「何だあの点数!？」

「あんな奴らいるなんて聞いてないぞ!？」

そりゃ言ってますからね。それじゃ、行きますか？

「アキさんにフユさん! フィールドを一掃します。それから一人ずつ確実に討ち落としましょう」

「「えっ、どうやって?」」

自分が笑顔で言うのアキさん達が聞き返してきました。

「見ててください、どりゃあああああああああ」

「いっくよー!!」

自分達は掛け声とともに、一体ずつDクラスの召喚獣をフィールド外に吹き飛ばします。

なんで掛け声かけるのかって? ノリですそんなもの。

そう、自分達のこの筈は攻撃力はほぼ無に等しい代わりに、
風や竜巻を操る能力が付属されています。

一振りで大体3〜5点消費しますが、
他の召喚獣をフィールド外に飛ばせたりとなかなかズル：
ゲフンゲフン、面白い能力です。

召喚獣は召喚フィールド外に飛ばされれば一度消えてしまいます。
再度召喚する前に一体になった召喚獣をアキさんとフユさんに討つ
てもらおう寸法です。
せこいですって？ 作戦ですよ？

Dクラスの生徒さんが慌てている隙に大体をアキさんとフユさんが
仕留めてくれました。
上手いっ！ やっぱ強いですね♪

「「「そんなんっ！？」」」

「戦死者は、補習！」

おお、西村先生お早いですね。お疲れさまです。

「ぐっじょぶです、アキさんにフユさん」

「ナイスだね！」

「「GJ！ 造と芳乃さんもね。まさかそんな使い方があるとはね…」」

自分達はアキさんとフユさんに近寄って言うと二人は笑顔で答えて

苦笑いしながら呟いた。

「強さは見かけに寄らないってことだね」

「あはは！芳乃さんと造のことだね」

4人でハイタッチしながらアキさんとフユさんと一息入れます。
てか自分達のことってどういう意味ですか？もうツツコミませんよ？
さてとりあえず本隊と合流して体制を整えますか。

「月野と芳乃、お前等も来い！」

「ふえい！？何ですか？自分戦死してませんよ？」

「そうだよ！？」

突然の言葉に自分と朋さんは不思議でなりませんでした。

「大人しく補習を受けろ！お前等は召喚しただけで戦死扱いだ！」

なにその超理論。清々しすぎる！？

「嫌です！理不尽ですよ！？！？試召戦争中じゃないですかっ！！！せん
せ許して下さい」

「横暴！！鬼、悪魔ー！！」

「いいから来るんだ！暴れるんじゃない」

自分と朋さんは暴れて逃げようと思いますけど、軽々と担がれて連れていかれてます。

「あゝう、アキさん、後は任せましたあああああ！

ゆーさんのフォローはアキさんがやってくださいね！！

勝って下さいね皆さあああああん！！！！」

「お願いだよ！！僕達の分まで頑張ってね！！！！」

そして、そのまま自分と朋さんは西村先生に連れていかれました

第10問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第十問

演劇

シェイクスピアの演劇『ジュリアス・シーザー』において、カエサル最後の言葉として登場する台詞は何でしょう。

木下秀吉&姫路瑞希&支倉ひばり&雨宮つぐみの答え

『ブルータス、お前もか』

教師のコメント

はい、正解です。特に木下君には簡単すぎましたかね。

吉井冬久の答え

『――は。小娘が、もちっと歳とって出直してこい』

教師のコメント

ランサーの最後の台詞ではなく、シェイク『スピア』の最後の台詞をお願いします。

吉井明久の答え

『私を倒しても、第二、第三のシェイクスピアが…』

教師のコメント

ゲームのやりすぎに注意しましょう。

新条ありすの答え

『時間を稼ぐのはかまわないが。別に倒してしまってもかまわないんだろ?』

教師のコメント

アーチャーの最後の台詞でもないです。

第11問

明久side

造達が連れていかれた後に声があがった。

『Dクラス塚本を討ち取ったぞ!』

一際大きな声があがり、ますます士気があがる。

「援護に来たぞ! もう大丈夫だ! 皆、落ち着いて取り囲まれなように周囲を見て動け!」

また、よくとおる声が聞こえた。そいつはDクラス代表の平賀だ。

「Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ!」

「「正念場だね」」

「「そうだね、ひばりにつぐみ、行こう」」

そう言う明久とつぐみと冬久とひばりは飛び出した。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本を狙え! 残りは包囲されている者を救出だ!」

平賀の号令の下、あっという間に雄二を中心にFクラス本体の周りがDクラスメンバーに囲まれる。

「Fクラス、撤退だ！分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

「逃がすな！ 個人戦ならそうそう負けはない！ 追いつめろ！」

Dクラス代表の声に従い追撃する・・・が、Dクラス本体に隙ができた。

「エレノアさん！」

「おん！向井先生。Fクラス エレノア・アリアドネが近衛隊の四人に総合科目で勝負や」

『え！？』

僕が言うとエレノアさんが頷いて言う

「^{サモン}試獣召喚！」

『し、^{サモン}試獣召喚！！』

【Fクラス	エレノア・アリアドネ	総合科目	1256点	VS
Dクラス	近衛隊X4	334点		

お互い頭上に点数が表示される。

『え！？』

「ほな、さようならやね♪」

一瞬で召喚獣が切り裂かれた

ちなみにエレノアの魔方陣が展開されて、召喚獣が出現する。容姿は同じで姿はデフォルメされており、姿は某ゲームの青い騎士と同じ姿となる。

「Fクラス吉井明久とFクラス雨宮つぐみがDクラス代表平賀君に現代国語で勝負を挑みます」

「近衛隊がやられるなんて」

僕とつぐみは平賀君に近寄って勝負を挑むと苦々しげに平賀君が呟いた。

あはは、エレノアさんの出現は予想外だったみたいだね。

「勝たせてもらうよ。試獣^{サモン}召喚！」

「ごめんね、これも勝負だから。試獣^{サモン}召喚！」

僕達が召喚すると平賀君も召喚した。
頭上に点数が表示される。

【Fクラス 吉井明久 現代国語 99点 & Fクラス 雨宮つぐみ 130点 VS Dクラス 平賀源二 129点】

学ランを着た僕の召喚獣と

うさみにねこしっぽをつけたシルバーメイルの装備姿のつぐみの召喚獣が現れた。

僕の召喚獣の武器は木刀でつぐみは剣なんだよね。

僕とつぐみはそれぞれの得物を使い、振り上げて平賀君の召喚獣を倒した。

こうしてFクラスVS Dクラスの戦争は終結した。

明久side end

冬久side

Dクラス代表 平賀源二 討死

「「「うおおーっ!」」」

その報せを聞いたFクラスの歓喜とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで畳や卓袱台ともおさばらだな!」

「坂本雄二サマサマだな!」

「坂本万歳!」

「姫路さん愛しています!」

「姉さん最高!」

「支倉さん結婚して!」

「雨宮を抱きしめたい！」

「真希さんとイチヤイチャしたい！」

「ありすさんと雪菜ちゃんを愛でたい！」

雄二を崇める声が所どころから上がった。

そろそろひばり達に熱烈アタックしている輩を見つけたほうがよさそうだ。

あ、おい。新条と雪菜ちゃんをあげるのはって…遅かったか。

「おい、お前等。帰るぞ」

「ん？もう話は終わったのか？」

「ああ、条件もDクラス代表に言ったしな」

「そっか。なら、帰ろう」

雄二と怜次がこちらに来たので僕が聞くと頷いて答えた。
それを聞いたアキ兄が立ちあがると

「「ちょっと待って、アキ君、フユ君」」

「「ん？どうしたの？」」

僕達をひばりとつぐみ呼びとめる。

「あのね、教室を簡単に掃除したいんだ」

「だから、誰か手伝ってほしいの」

ひばりとつぐみが僕達を見てから周りにいるクラスメイト達を見て伝える。

「僕達は手伝うよ」

「んじゃ、俺も手伝うで」

「巧くんが手伝うならわたしもです!」

僕とアキ兄が言うと巧も手伝う事を申し出たら、真希も手伝うと言った。

「終夜、ウチらも手伝おう?」

「そうだな」

「瑞希は当然」

「はい! 手伝います!」

島田が終夜の袖を掴んで言うのと終夜は頷いた。

辰也が姫路さんを見て聞くと笑顔で姫路さんは答えた。

「なら、うちも手伝うで♪」

エレノアさんも笑顔で言った。

多分、この教室のことで調べたいことがあるんだろうな。

「「ありがとう、皆」」

ひばりとつぐみは嬉しそうに笑って言う。
やっぱり笑っても可愛いな。

「「お礼に明日デザート作ってくるね」」

と、ひばりとつぐみが笑顔で言う

「「「俺たちも手伝おう!!!!」」」

Fクラスの野郎がキリツとした態度で言う。
こいつらはデザート目当てだろうな。

「掃除をしてみると、改めてヒドさを感じるな」

そう言って怜次は一つ息をつく。

「あたしもここまでとは……」

「これは酷すぎるよね」

その横で、げっそりとした表情のひばりとつぐみがつぶやいた。

「まさか、半分以上の畳が腐りかけているとは……」

クラス総出で手早く終わらせた方がいいと言う怜次の意見もあって、
全員で掃除を始めたのだが、開始五分であび叫喚の地獄絵図となっ
た。

結論から言えば、生半可な清掃ではどうにもならないことが判明し

た。

壁のスキ間はそこかしこにあり、黒板はひび割れ、窓ガラスは割れてないものを探すほうが早かった。

極めつけは、畳だ。

踏んだ感触がおかしいことに気づいたひばりとつぐみが、男子数人の手を借りて畳をめくると。

畳が腐っていたのだ。

画像がグロいので、モザイクまで掛かってしまっている。

これを見たひばりとつぐみは、急遽掃除を断念。全ての畳のチェックを始めた。

結果は惨憺たるありさまで、腐りはじめ程度のものまで含めると、半分以上の畳が腐っていることが判明した。

「どおりで、すき間やガラスがはまってない窓が多い割には臭うと思っただぜ」

雄二も頭が痛いとはかりに額を押さえて天井を仰ぎ見た。

が、すぐに真剣な表情で周囲を見回す。

「みんな見たか?! この教室はここまでひどいということだ! これを我慢できるのか?!」

俺たちはたしかに成績不良者の集まりかもしれん。

だが、ここまでの仕打ちには、もうガマンがならない! そうだろう?!」

『そうだ! 俺たちだって人間なんだ!』

『こんなのは差別だ! 奴ら(Aクラス)にも味あわせるべきだ!』

『姫路さん、結婚して下さい!』

『支倉さんと兩宮さんとチュッチュしたい!』

よし、ひばりとつぐみを述べた奴。
後でo h a n a s iしてやる。

「そのとおりだ! 俺たちはつかみとるんだ! 人間にふさわしい
教室を!」

『『『『『おおおおーっ!!!!!!』』』』』

Fクラスが雄たけびを上げる。
これほどのありさまは酷いと思ったんだろうな。
雄二はシスコンでありすに甘いからな。

「よし、これ以上はどうしようもないだろう。畳を戻して帰り支度
だ」

怜次の言葉で皆が片づけ始めた

「なるべくまともな畳を中心に持ってきてねー!」

ひばりが皆に指示をする。

第11問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第十一問

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は○を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希&雨宮つぐみ&支倉ひばりの答え

『初潮』

教師のコメント

『正解です。』

神埼美紅の答え

『膨張』

教師のコメント

なんで膨らむんですか。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

『随分と急な話ですね。』

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の

ことを月経、初潮のことを初径という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

『詳し過ぎです。』

吉井冬久の答え

『初恋』

教師のコメント

『恋は人を変えられますが、残念ながら外れです。』

吉井真希の答え

『初潮』

教師のコメント

『正解ですが、珍回答が思いつかないからって渋々と書かないでください』

相沢綾菜

『しあさって』

教師のコメント

『保健体育は理解できてないんですね。』

第12問

ひばりside

「そろそろ、帰ろうか」

「だな」

「あ、待って！アキ君、フユ君」

あたしは帰ろうとするアキ君とフユ君を呼びとめる。

「どうしたの、ひばりちゃん？」

「つぐみちゃん、あのね。職員室まで付き合ってほしいの」

同じく帰り仕度をしていたつぐみちゃんに聞かれるとあたしはすぐに答えた。

「職員室？ いったい何の用で？」

理由がわからずフユ君は首を傾げた。

「さっきの畳のことだよ。」

設備に差があるのは仕方ないけど、不衛生であることを受容する理由にはならないもの」

あたしはフユ君を見て頼みこむように言う。

「いいんじゃない？」

「そうだね、ひばりの頼みごとだし」

山崎君が笑顔で言うのとフユ君は笑顔で頷いて言った。

「でも…大人数で行くのはダメだよね？」

「あ、そうだね」

つぐみちゃんが苦笑いしながら言うのとアキ君は気づいて困った顔をする。

「では、フユ兄とひばりちゃんとでいけばいいと思います☆」

真希ちゃんが笑顔で提案してきた。

「じゃあ、あたし達は献立でも考えようか。瑞希ちゃん」

「はい、そうですね」

つぐみちゃんが笑顔でみっちゃんに言うともみっちゃんは笑顔で頷いた。

「じゃあ、僕たちはいこっか」

「あ、うん」

フユ君が笑顔で言うのであたしは頷いて二人で歩き出した。

着いた場所は：

「で、どうして学園長室の前にいるのかな？ あたし達……」

あたしは遠い目をして言うと

「おそらく、職員室で担任の福原教諭に訴えても、型どおりに申請しておくだけで終わっちゃうかもしれないし。なら、最初っから一番頭に話を通しに来たほうが早いでしょ？」

そう言って、フユ君はドアをノックした。

「開いてるよ」

中から老女の声が聞こえる。

「失礼します」

「し、失礼します」

フユ君は堂々と、あたしは緊張気味に入室した。そこには、机で書類に目を通している老女がいた。

「二年Fクラスの吉井冬久です」

「おなじく、二年Fクラスの支倉ひばりです」

あたし達が自己紹介すると、老女は面倒そうに顔を上げ、二人をみやると、フンと鼻を鳴らす。

「あたしが学園長の藤堂カヲルさね。で？ 何の用だい？ この、すつとこどっこい共。」

こっちは忙しいんだよ。とっとと話な、ウスノロ」

罵倒された。

あたしがひきつった顔でいると

「今日は、二年Fクラスの教室のことでお話があつて参りました」

フユ君があたしの変わりに話し始めた

その目は、面白そうなものを見る目になっている。

一方で学園長も、素早く手元の端末で何かのデータを呼び出している。

「まず、最初に断っておきたいのは、僕たちがこちらへうかがったのは、

教室設備の向上の陳情ではなく、衛生状態改善のための陳情です」

間を取り、反応を見る。

「続けな」

「はい。文月学園では、二年次より、成績によりクラスが分けられ、設備に格差が設けられていることは周知の事実です。

私をはじめとするFクラスの面々は成績不良のため最低クラスとなりましたが、

それ自体は自身の努力が及ばなかったものであり自業自得であると考えます」

「ふん、わかってんじゃないか」

言いながらも端末に記された、試験を途中退席した理由にも目を通していた。

「はい。ですが本日、教室の清掃を行った結果、ある事がわかりました」

「……何がわかったんだい」

「Fクラス教室が、学生では手の施しようがないほど劣悪な衛生状態だという事がです」

「……さっきあんたも言ったように、設備に格差があるのはこの学園の方針だよ」

「わかっています。ですが、衛生状態は、設備じゃありません」

あたしの言葉に、学園長の目が、スウツと細まる。

「振り分け試験時、監督をされていた教師の方はこう言われました。『体調管理も試験のうち』だと」

「ふむ。で？」

「はい、私は衛生状態の改善も体調管理の内であると考えます。したがって、教室の清掃を行いました。

しかし、学生の手が及ばない部分には手の出しようがありません」

「だから、陳情に来たと、そういうことだね」

「はい」

あたしは緊張した面持ちでうなずくとフユ君が手を握ってくれた。
学園長は少し考えてから答えた。

「……いいだろ」

その様子に、フユ君は軽い驚きの表情を浮かべている。

「ただし、全部とはいかないねえ。こちらで吟味させてもらうから、リストを作りな」

「あ、はい！」

「あと、業者の手配が面倒だからね。入れ替え等はお前達自身でやるんだ。いいね」

「はい！　ありがとうございました！」

「ありがとうございました、学園長」

あたしが頭を下げるのにあわせてフユ君も下げる。

「アンタ達お似合いだねえ？」

学園長はニヤニヤと笑って言う。

え、えー！！！？　一緒にいるだけでなんでそうなるのかな。

「あ、あの、あたしが無理言って付き添ってもらったんです！」

「まあ、いいさ。リストは一週間以内に、担任を通じて提出しな。リストの作成は支倉お前さんが責任を持ってやるんだよ。いいね？ わかったらとっとと失せな」

そう言って学園長はシッシッと手を振った。

「はい！ 失礼しました！」

「失礼しました」

あたし達は退室の挨拶をしてでていく。

ひばりside end

学園長side

「よろしかったのですか？」

入れ替わりで入室してきた高橋学年主任が学園長に訪ねた。

「かまわないよ。もともと衛生状態の改善だけなら受け入れるつもりだったからね」

「ですが……」

「衛生状態は設備じゃない。あたしもそう思うよ」

学園長の言葉に高橋は驚いた。

「そ、それでは……？」

「去年まではそんなことに気づく奴なんて居なかったねえ。
今年の二年は面白いのがそろっていきそうだよ」

「は、はあ……」

楽しげに笑う学園長に、高橋は一抹の不安を感じた。

バカテスト 第十二問

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希&雨宮つぐみ&支倉ひばりの答え

『脂質 炭水化物 タンパク質 ビタミン ミネラル』

教師のコメント

『流石は姫路さんに支倉さんに雨宮さん。優秀ですね。』

吉井明久の答え

『砂糖 塩 水道水 雨水 湧き水』

教師のコメント

『それで生きていけるのは君だけです。』

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

『保健体育のテストは一時間前に終わりました。』

新条ありすの答え

『科学 秘密 超能力 資金 情報』

教師のコメント

『珍回答を必死に考えないでください』

吉井冬久の答え

『モデルガン 銃 銃弾 ライフル 火薬 スナイパー』

教師のコメント

『君の将来があらゆる意味で心配を通り越して不安です。』

坂本雄二の答え

『ありす 食糧 愛 資金 力』

教師のコメント

『どこまで溺愛してるんですか』

第13問

あたしは、そのまま教室に向かい、戸を開けた。

「?……あれ? みっちゃんにつぐみちゃん?」

「! ひばりちゃん!」

「あ、ひばりちゃん」

教室にはみっちゃんをつぐみちゃんが居た。

「どうしたの? って手紙……?」

「あ、あう……」

「瑞希ちゃんが書くの終わるのまってるんだよ」

みっちゃんは突然のことにフリーズする。つぐみちゃんは笑顔で言う。

手紙を見ると『あなたのことが、好きです』と書かれていた。

「ラブレター?」

「あ、あうう、見ちゃダメです」

みっちゃんはあわてて隠そうとするが、すでにあたしに見られた後だよ?

「だれに……?」

あたしはみっちゃんに、そっと訊ねた。

「……………／／／／」

みっちゃんは、真っ赤になってうつむいたまま黙っている。

「……もしかして、辰也くん?」

「ひゃ、ひゃう!」

言われてはねるように顔を上げた。顔は真っ赤である。

「おおー当たった」

「正解だね」

あたしとつぐみちゃんはにこにこ顔で笑いあう。

「たっだいまーっ!!」

「うひゃあっ!」

「ひうつっ!!」

「ひゃっ!?!」

突然のことに、3人は飛び上がらんばかりに驚いた。

ハラリ

流れるようにみっちゃんのちゃぶ台から紙切れがアキ君の足元へと滑っていく。

「なんだこれ」

「「「あっ?!」「」」

アキ君が手紙を拾いあげると不思議そうに見て中身を見る。
するとこちらに近寄って

「ごめん、辰也に渡すべきの見るべきじゃなかったね
後、その手紙」

アキ君は苦笑いして手紙を渡して優しく笑った。

「よい返事がもらえるといいね」

「ハイ♪」

アキ君が笑顔で言うときみっちゃんはとても嬉しそうに笑った。
それにしてもアキ君は優しい、フユ君も優しい。

この双子はどこまであたし達の気持ちを膨らませば気がすむの
だろうか。

「アキ兄」

「あ、今行くよ。じゃあね、つぐみ、ひばり。瑞希ちゃん」

フユ君の声が聞こえた時は心臓がどきっとした。
それを見たアキ君が苦笑いしてからそそくさと用をすまして教室から出て行く。

「ひーちゃん」

「ひばりちゃん」

「…うん…好きなんだけど…ね」

みっちゃんをつぐみちゃんがあたしに声をかけるけど苦笑いしてしまふ。

わかってる…今のままだと誰かに取られてしまふんじゃないかって。

「ちょっと、支倉に雨宮。行かないの？」

「あ、待って！ほら、行こう？ひばりちゃん、瑞希ちゃん」

どうやら心配でここに来た島田さんが言うをつぐみちゃんが立ちあがる。

それに続いてあたしとみっちゃんも立ちあがると島田さんの方に5人で向かう。

途中で買い物をしてマンションに到着するとあたしの部屋に案内する。

「到着！ここがあたしの家だよ」

「その隣があたしの家なんだよ」

つぐみちゃんが玄関を開けて、みっちゃん達に振り返って言うところ

たしも説明する。

「へえ〜。雨宮：今日はご家族の方は？」

マンションに入ると島田さんが聞いたきた。

「お母さんがいると思うよ？さ、上がって」

「「「お邪魔します」」」

つぐみちゃんが笑顔で言うときみっちゃん達は笑顔でつぐみちゃんの家に入る。

「あら、つぐみ。お帰り〜♪ひばりちゃん、いらっしやい☆」

「お母さん、こちらクラスメイトの友達。」

つぐみちゃんのおばさまで雨宮はるかさん。

身長は160cmで、大人になったつぐみちゃんみたいな容姿かな？
とっても美人で料理も上手だけど：つぐみちゃんには劣るんだ
とか言ってたっけ。

あたしのお母さんとはとっても仲が良いんだよね。

「「お邪魔してます」」

「お久しぶりです、はるかさん」

「今日は休みですか？」

エレノアさんと島田さんが笑顔で挨拶してみっちゃんも笑顔で挨拶

する。

あたしは気になって聞くと

「ええ、瑞希ちゃんお久しぶり。そうなの…今日はいいいことがありそうだからね♪」

「お母さんが大方無理言っただけでしょ？もう、お父さんも呆れてると思うんだけど」

はるかさんは笑顔で答える。

つぐみちゃんはそれに呆れながら言うと言動をし、

「あ、そうそう！食材はこっちのキッチンね。で、そっちがリビングだから、適当に座ってて」

そう言いながら、つぐみちゃんは食材を冷蔵庫へとしまっていく。

「あ、つぐみちゃん。手伝います」

「あたしも！」

すると、みっちゃんがつぐみちゃんに近寄って手伝い始めた。

あたしもそれに賛同するように手伝うと

「ありがと、瑞希ちゃんにひばりちゃん」

つぐみちゃんは、一端手を止めてみっちゃんとあたしに笑いかけると作業に戻る。

一通り仕舞い終えたら、飲み物を用意してみんなのところへと。

「これ飲んで待っててね？　あたし着替えてくるから」

そう言っつてつぐみちゃんは奥へ入っていった。

「うちのつぐみと仲良くしてくれてありがとうね」

「そんな、こっちこそ仲良くしてくれてることにお礼をいいたいくらいなのに」

「そうですよ！」

「せやから頭をあげてや」

はるかさんはつぐみちゃんを見送るとあたし達を見て頭を下げてから微笑んで言う。

それに島田さんとみっちゃんとエレノアさんが慌てて言った。

「あらあら：ありがとうね。おばさん、そう言ってもらえると嬉しいわ」

はるかさんが笑顔で言った。

しばらくして私服に着替えたつぐみちゃんが戻ってきたの。

あ、ちなみにあたしも着替えてからつぐみちゃんの家に戻ったよ。

「ねえ、支倉に雨宮……」

不意に島田さんがあたし達に声をかける。

「「？　なに？　島田さん？」」

「ウチ……今、気がついたんだけど、支倉と雨宮、服の中にメロンパンをふたつも入れてるのね」

不思議そうに聞き返すと島田さんは負のオーラを垂れ流しにしながら言う。

「「なに言ってるの？ 島田さん」」

島田さんの見上げた顔を見たら、目のハイライトが消えていた。

「「こ、怖っ?! 怖いよ?! 島田さん?!」」

「メロンパン、メロンパンなの……」

うつろな顔の島田に、エレノアさんとみっちゃんが苦笑いする。

「し、島田さん？ あたし達、メロンパンなんて入れてないよ?」

「そ、そうだよ。見間違いだよ?」

あたし達はそう言って島田さんから離れて両腕を開く。

たゆん。

あたしとつぐみちゃんの胸に、たわわに実るメロンが二つ。

「そんな最終兵器をもってるなんて、うちは……うちはー!!」

膝をついて号泣する島田さん。

「あ、あはははは……」

「細かいことやと思うんやけど」

みっちゃんは苦笑いし、エレノアさんはどうでも良さそう。

「た、確かにあたしとつぐみちゃんの胸って大きいんだけど……」

島田さんが号泣する理由に気づいたあたし達は困ったように胸を押さえる。

そして戸惑うような顔で問いかける。

「「……変じゃない？」」

「「へっ？」」

その問いに、エレノアさんと島田さんは呆氣にとられた。

「だ、だって、あたしの体格で、おっぱいだけおっきいんだよ？
なんか……不格好で……」

「この体格でおっぱいだけおっきいなんて不似合いで……」

「いや、そんなことはないと思うわよ？　ウチは」

「そうやで、うちもそう思う」

あたし達が不安そうに言うと島田さんとエレノアさんは否定する。

「「でも……」」

それでも、あたし達の表情は晴れることはない。

「あたしは、むしろ島田さんが羨ましいけどなあ」

「だよね、羨ましいよ」

そう言ってあたしとつぐみちゃんは島田さんを見る。

「へっ？　ウチ？」

「「うん」」

驚きを隠せない島田さんを見て、あたし達はうなづく。

「で、でも、ウチ、可愛くないし、おっぱいだって……ちっちゃいし……」

言いながら島田さんは落ち込む。

「そんなこと無いよ！」

突然つぐみちゃんが大声を出した。

「あ、雨宮？」

島田さんは驚いて呆然としていると

「島田さん、島田さんは十分可愛いよ？」

手足は細くて長いし、肌だっつきめ細やかで綺麗だし、腰の位置だ

って高くて、
本物のモデルさんみたいだよ」

「で、でも、ウチ、おっぱい大きくないし……」

励ますようにあたしが言うけど、おっぱいに拘る島田さん。

「はあ、島田さん、おっきいおっぱいにこだわりすぎだよ……」

「そうだよ、こだわらなくても良いところあるのに」

「だ、だってえ……」

島田さんはすでに半泣きになっていた。

「あのね？ 島田さん。本物モデルさんって大抵おっぱい小さいよ？」

「？ でも雑誌で見かける女の人は、みんなおっぱいおっきかったわよ？」

そう言っで島田さんは首を傾げる。

「それはグラビアアイドルじゃないかな？ なんにしても、あたし達よりずっと良いと思うよ？」

「そ、そう？」

つぐみちゃんが言うと島田さんは照れ臭そうに聞いた。

「うん。あたしなんて……」

「そうだよ…あたしなんか」

「な、なんでそんなに落ち込むんや？」

エレノアさんに尋ねられて、つぐみちゃんとあたしはため息をついた。

「あたし達、この容姿とおっぱいのせいでさんざんバカにされたから」

「それとあたしは超能力で…ね」

そうやってため息一つ。

「バカにされたって……」

島田さんとエレノアさんは戸惑っていた。理由を知ってる、みっちゃんは悲しそうにしている。
つぐみちゃんの母であるはるかさんも悲しそうだ。

「胸でか女」

つぐみちゃんがボソリとつぶやく。

「化け物、おっぱい魔人、エロ女」

そして、苦々しい顔になりながらあたしは喋り、

「キモ胸」

シンッと静まる。

「な」

島田さんの肩が震えた。

「なによそれっ!!」

部屋中が鳴動した。

「今すぐそいつ等全員連れてきなさい！ 全員顔がわからなくなるまで、ぶん殴ってやるわ！」

島田さんは怒っていた。いままでにないほど。

「「ありがと。島田さん。大丈夫。言った人たちは、みんなぶっ飛ばされてるから」」

あたしとつぐみちゃんは笑顔でお礼を言った。

「「アキさんとフユくんがね？」

今の島田さんみたいに怒ってくれて、みんなぶっ飛ばしちゃった」」

うれしそうにあたし達は笑う。

「「だから、もういいの。こんなあたし達でも大切にしてくれる人がいるから」」

あたしとつぐみちゃんは笑顔で呟いた。

「なら、心機一転で胸を締め付けないで通ってみようで」

「「え…でも…」」

エレノアさんが笑顔で言うけどそこでも言われてしまったらと思うと怖い。

「大丈夫やて、あのクラスはそんなこ言わへんよ」

励ますようにあたし達に言うエレノアさん。
なんだか勇気をもらえたような気がする。

それから5人は、明日のお弁当の相談をし、一部の仕込みをしてから、

翌朝またつぐみちゃんの家に来まることになった。

つぐみの母であるはるかも手伝ってくれたので良い仕上がりになった。

「じゃあ、みんな、また明日」

「またね」

「明日はがんばりましょう」

「また、明日ね」

「では、また明日です」

「ほな、さいなら」

そう言うにつぐみちゃんとあたし以外の者は歩いて帰って行った。

第13問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第十三問

問題

以下の意味の四字熟語を答えなさい。

自然のままで飾り気がなく、ありのままの真情が言動に現れること

姫路 瑞希&雨宮つぐみ&支倉ひばりの答え

『天真爛漫』

教師のコメント

さすがに簡単すぎましたか、また類義語として純粹無垢と言うものもあります。

覚えておきましょう

坂本 雄二の答え

『新条ありす』

教師のコメント

一瞬丸にしそうでしたが四字熟語ではないのでダメです。

吉井明久の答え

『雨宮つぐみ』

教師のコメント

あの、四字熟語で答えて

木下 秀吉の答え

『新条ありす』

教師のコメント

あなたもですか。

秋月終夜の答え

『島田葉月』

教師のコメント

えっと…まだ出てない人をあげられても。

第14問

朋side

「うあー……づがれだー」

「「そうだね」」

「右に同じー」

「僕も」

机につつぶすつぶみちゃんとひばりちゃんとあきつちと造とボク。何とか迫りくる先生方を説得し、午前のテスト、四教科分も終了した。

ま、ボク的にはテストより先生方を説得する事の方が疲れたけど。

「うむ。疲れたのう」

木下君がいつの間にか近くに来ていた。

今日の髪型はポニーテール……本当に男として見られたいのかな？

「……（コクコク）」

むつつんはいつのまにか居たし。

「よし、昼飯食いに行くぞ！　今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「胃もたれしませんか、それ？　午後に支障がないようにしてくださいね」

勢いよく立ち上がる雄二君からは全然疲れが感じられないのだ。それにしても、昼食のメニューはそれで良いのかな？

「これくらい余裕だ。造に朋に支倉に雨宮、お前等はもっと食べないと大きくならんぞー」

「雄二、わたしは？」

雄二君が言うところすちゃんが小首を傾げて聞いてきた。

「ありすはそのままでもいいんだよ」

「わかった♪」

笑顔でありすちゃんを抱きしめる雄二君。
さ、砂糖がでそう！！

「ゆーさん。いい根性してますね・・・？　いつか追い抜いてやりますから覚悟なさい？」

「「あたし達、ちっこくないよ!?!」」

「僕はこれくらいでいいのさ☆」

造が不機嫌そうに言うつつぐみちゃんとひばりちゃんが声を揃えて叫ぶ。

ボクは笑顔で宣言してるけどね☆

「つぐみちゃん、ひーちゃん。落ち着いてください。あ、あの。皆さん……」

「そうよ。ところで、お昼のことなんだけどね…」

瑞希ちゃんがつぐみちゃんとひばりちゃんを宥めてから皆に言う和美波ちゃんも同意するように言う。

「う、うん」

ひばりちゃんとつぐみちゃんは頷いて深呼吸する。

「うん？あ、姫路さんと美波も一緒に屋上に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……お、お昼なんですけどね」

「ウチらその、昨日の約束の……」

あきつつきが言うと二人はどきまぎしながら言う。

「昨日の約束……？なんだっけ？」

「おお、もしか弁当かの？」

藤村君が不思議そうに言うとき秀吉君が気づいて聞き返す。

「は、はいっ。そうです!」

「迷惑じゃなかったら……どうかな終夜?」

瑞希ちゃんは頷いて美波ちゃんは秋月君に聞いていた。

「迷惑なもんか! ね、みんな!」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「今日はお弁当持ってきていないので助かります」

ふゆっちが笑顔で言うのと雄二君も頷いて造は嬉しそうに言った。

「そうですか? 良かったあ」

「瑞希と支倉と雨宮と分担して作ったのよ? 感謝しなさいよ?」

瑞希ちゃんは嬉しそうに言うのと美波ちゃんは笑顔で皆に伝える。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「賛成や!」

秀吉君が言うのと傍にきてたエレノアさんが笑顔で言う。

「それでは先に行行っててください。ちょっと飲み物を買ってきます」

「さて造、俺も行く。昨日頑張ってくれた例も兼ねて全員に奢りだ」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？瑞希達は悪いけど用意してて」

「じゃあ、僕も！」

「私も！」

「わかりました。美波ちゃんよろしくお願いします」

造が言うのと雄二君が近寄って言い、美波ちゃんも近寄ると言い、瑞希ちゃん達に伝える。

ボクとありすちゃんも一緒に行くことにしたよ！

瑞希ちゃんは頷くとひばりちゃんをつぐみちゃんに近寄る。

「悪いな。それじゃ行くぞ造、島田に朋にありす」

「はいです」

「おっけー」

「らじゃー！」

「うん！」

雄二君が言うのと造とボクとありすちゃんと美波ちゃんは笑顔で答えた。

「きちんと俺たちの分をとっておけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

雄二君と美波ちゃんとボクと造とありすちゃんは財布を持って教室を出て行った。

朋side end

つぐみside

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空だった。

「あ、シートもあるんですよ」

みいちゃんがバックからビニールシートを取り出した。

「「風と日差しが心地いいね。それにお弁当も楽しみだな」」

「ああ。こんな好条件で女子の手料理を食べるなんて、俺達健全なる男子高校生にとって最高の贅沢だ」

「うむっ、男として心から同意じゃ」

「……………（こくこく）」

「俺としては、妹のありす以外の手料理か楽しみだな」

「俺もだな」

「俺もや」

「ボクもゆきちゃん以外の手料理楽しみだよ」

アキ君とフユ君が笑顔で言う。秋月君も同意するように言い、秀吉君も同意する。

土屋君と怜次君、辰也君と巧君と紅葉君も同意していた。

「みんなで作ったから、量が多いかもしれないけど」

あたしは座って重箱の蓋を持ち上げる。

全員が期待してこちらを見ていた。

どれも素晴らしく美味しそうな弁当が並んだ。

「「「「「おおっ！」「」「」」」」

今、アキ君達の声の一つとなった。

「つぐみちゃん、ひーちゃん。皆、喜んでくれますね」

「そうだね」

「作ったかいがあるね」

「こんなに喜ぶことなんやろうか」

「嬉しそうだね」

「うん、今度は参加したいかな」

瑞希ちゃんは嬉しそうに笑うとあたしとひばりちゃんも頷いて、エレノアさんは不思議そうにし真希ちゃんと雪菜ちゃんは笑顔で会話していた。

「とりあえず、食べようか」 ↑アキ君

「そうだな」 ↑フユ君

「美味しそうじゃのう」 ↑秀吉君

「賛成！」 ↑秋月君

「どれがいいだろうか」 ↑怜次君

「んじゃ、俺はこっち」 ↑辰也君

「なら、俺はこっちや」 ↑巧君

アキ君達はそれぞれの食べ物を箸でつまむと口に運ぶ。
全員で緊張しながら見ていると

「」「」「美味い!!」「」「」

と男子全員が声を揃えて笑顔で言う。
とっても嬉しかったかな。

「た、辰也君。本当ですか？本当に」

「んあ？嘘なんて言っていないぞ？」

瑞希ちゃんは感激して言う。辰也君は不思議そうな顔をしてからすぐに答えた。

好きな人に褒められて良かったね、瑞希ちゃん。

「おう、待たせたな！」

みんなで食べていると坂本君が入ってきた。

「へー。こりゃ旨そうじゃないか、どれどれ…」

坂本君はお弁当を見て言う。と卵焼きを取り、それを口に運ぶ。

「うめえ！」

「む…私も参加すればよかった」

笑顔の坂本君を見てありすちゃん是不機嫌そうになっていた。

「こ、今度はありませんも参加しましょ。ね？」

「美波ちゃんがそう言うのなら」

それを見た美波ちゃんが後から来てありすちゃんを宥めた。
美波ちゃん、ありがとう！

「美味しそうですね」

「ボクらも食べよう♪」

そして後から来た造君と朋ちゃんもシートに座り、仲良く弁当を食べた。

「あ、デザートも寒天もあるよ」

「ティラミスもありますよ」

「団子もあるよ」

「ドーナツもあるからね！」

食後もデザートまでも豪華だった。みんなで美味しくいただいて有意義な時間となった。

つぐみ side end

終夜 side

「そういえば、坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

美波が雄二に近寄って問いかけると怜次が聞きかえした。
それに美波は頷いた。

「試召戦争だけど、次はBクラスなんだったな？」

「ああ。そうだ」

辰也が聞くと怜次は頷いた。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスでしょう？」

俺達の目標はAクラスだ。通過点に過ぎないBクラスを相手にする理由がわからないのだ。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

戦う前から降伏宣言。

とはいえ、無理もないだろう。文月学園はAからFの6クラスから成るけど、Aクラスは各が違う。

高成績のエリートが属する場所だ。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスを必ずやる」

「怜次、さっきといってることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

一騎討ちね。それがうまくきまればいいんだけど。

「とりあえず一騎打ちに関してはまたAクラス戦の時に話を聞くと
して、どうやるんですか？」

「Bクラスをやったら、設備の入れ替えない代わりにAクラスに攻
め込むよう交渉する。」

設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCク
ラス設備で済むからな。
まずうまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻
め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどね！」

結構腹黒い計画だな。

嫌いではないけど。

「しかし、上手く行くのか？ 向こうとしては試召戦争の方が確実
なのは事実だ」

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？
こちらに姫路とおそらく月野と芳乃がいるということは既に知れ渡
っていることじゃろう？」

辰也が言うとう秀吉も考えるように呟いた。

「その辺に関しては考えがある。だから心配するな。とにかく今はBクラスをやるぞ。」

細かいことはその後に教えてやる」

「そうですね。今はBクラス戦に集中しましょう」

「みんなで頑張れば大丈夫だよ！」

雄二君が言う造は頷いて言い、朋ちゃんは笑顔で言う。
Bクラス戦か、頑張らないとな。

第14問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第十四問 保健体育

問題

女性が妊娠時、体内で子供（胎児）を育てるときには胎児の入れ物になる器官を答えなさい。

土屋康太の答え

『子宮』

教師のコメント

正解です。保健体育に関しては学年一位の土屋君には簡単な問題です。すね。

ところで解答用紙についている血痕は、土屋君の鼻血ですか？

秋月終夜の答え

『試験管』

教師のコメント

今の時代、試験管の中で胎児を育てる事も可能と思われる時代ですが、

試験管は女性の体の一部ですらない為、不正解です。

吉井明久の答え

『お母さんのお腹』

教師のコメント

文月学園が幼稚園だったら、よくできましたと褒めてあげたいのですが、残念ながら、文月学園は高校なので不正解です。

相沢綾菜の答え

『キャベツ畑』

教師のコメント

どうやったらそんなことになるのか気になります。
土屋君に教えてもらってないのでしょうか？

第15問

ありすside

「明久に冬久、今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告して来い」

「断る！ 雄二が行けばいいだろ」

「やれやれ、それじゃジャンケンで……」

「雄二、わたしが行くのはダメなの？」

明久君と冬久君を見て雄二が言う二人はスグに断る。
すると気だるげに言うのでわたしが行ってはダメか尋ねることにした。

「そうですよ、雄兄。わたしとありすちゃんも役に立ちたいです」

雪菜ちゃんも賛同するかのように言う

「いや、その…二人には危ないというか」

「二人に行かせるくらいなら俺が行く」

雄二がしどろもどろに言うとお兄ちゃんがすくつと立って言う。
もう、それだとわたしが役に立てないじゃん。

「あたし達が行こうか？」

みんなで騒いできるとひばりちゃんとつぐみちゃんも言う。
二人は幼なじみが心配なんだね。

「それはもつとダメ！」

「ひばりとつぐみに何かあったら僕達が悔やむよ!!」

明久と冬久がそう言う二人の肩を掴んで却下。
ううむ、こうも堂々巡りには困ったな

「では、わたしと巧くんとで」

「俺は行くと言ってへんよ!？」

真希ちゃんが笑顔で言うとき山崎君がツツコミをいれていた。
この二人もお似合いだね♪

「でもさ…Bクラスってあの卑怯者の根本だよ？」

雪菜ちゃんを膝に乗せてるモミジが言うとき雄二達は驚きながらモミジを見る

「それは本当なの?、モミジ」

「うん、ボクの情報網であつたからね」

わたしが聞くとモミジは笑顔で答えた。

「となると戦略を考え直さないとダメだな」

お兄ちゃんが腕を組んで考え込む。
根本君は評判の良くない生徒でケンカに刃物はデフォルト。試験に
カンニングは当たり前。
という噂が流れているんだよね。

この後、真希ちゃんと山崎君がBクラスに宣戦布告に行くことになった。

ありす side end

ひばり side

「今日は転校生を紹介する。水野入れ」

先生がそう言うのと扉を見て言った。

「はいっ！」

水野と呼ばれた子は元気な声で言うところちよこちよこと教室に入ってきた。

身長は135くらいかな？見た目はあたしとつぐみちゃんと朋ちゃんと変わらないけど。

これを見たら他のみんなが騒ぐんだろうな

「えっと…みじゅの…じゃなくて。水野彩華です、よろしく願います☆」

にぱっと笑って水野さんが言う

『『『『新たな、ロリキャラキターッッ！！！！！！』』』』』

うん、予想はできてたけど…こうも騒がしいと呆れちゃうかも。

「ロリって…子供じゃないもん！」

水野さんは不機嫌そうに呟いた。

うん、お互い苦労しそうだけど…頑張ろうね？

「あーやにゴスロリを着せないと！」

「「やめなさい！」」

朋ちゃんが立ちあがったのであたしとつぐみちゃんはピコハンで叩いた。

まったくもう、水野さんが困ってるじゃない！

そして、水野さんが空いてる席に座るとテストを受けた。

チャイムが鳴り、テストが終わると真希ちゃんと山崎君はテストを終えたら宣戦布告に向かったよ。

午後のテストも無事終了し、放課後。

「真希ちゃん、大丈夫？」

「はい、大丈夫です☆」

「ちょっと厄介やったところもあったけど」

帰り道を真希ちゃんと山崎君達と仲良く歩いて帰りながら宣戦布告の時の会話をする。

ちよっとてこずったけどなんとかあったみたいだね

エレノアさんとは帰る道は違うが途中までは一緒に帰ろうということになったのだ。

「転校初日にBクラスと戦うのか」

「大変だろうけど、頑張ろうよ。水野さん」

「ひばりちゃんの言う通りだよ」

とぼとぼと歩く水野さんにあたしとつぐみちゃんは笑顔で励ますように言う。

「ところで、根本が卑怯なことをしないかな？」

「それはわからんけど」

「だよね」

フユくんが心配そうに言う。と山崎君が苦笑いしながら答えた。

真希ちゃんも苦笑いしてる。

「あ、ここでお別れやね。ほな、また明日」

分かれ道に着くところでエレノアさんと別れた。

「「みんな、勉強頑張ろうね」」

「「そうだね」」

「はい！」

「せやね」

「もちろん！」

あたしとつぐみちゃんが笑顔で言うのとフユ君とアキ君は笑顔で頷いた。

真希ちゃんと山崎君と水野さんも笑顔で答えたよ。

明日は頑張らないとね。

あ、そうそう！つぐみちゃんとあたしとアキ君とフユ君と山崎君と真希ちゃんと水野さんとは

同じマンションなんだよ。凄い偶然だよね？

そして、マンションに帰るとそれぞれの部屋に戻って勉強して晩ご飯を食べたよ。

ひばり side end

「さてみんな、総合科目テストご苦労だった」

教壇の上で、怜次は教卓に手をつきながら皆の方を向いている。

Dクラス戦から二日。昨日に引き続いて本日の午前中もFクラスはテスト漬けだった。

Dクラスとの戦いでは、総合科目勝負もあったため、すべての科目にダメージが入っている。

そのため、補給テストの量が格段に増えるのだ。

「先に説明したとおり、昨日のうちにBクラスへは宣戦布告済みだ。今日午後。すなわちこの後すぐに開戦だ。腹ごしらえはすんでるな?！」

『『『『おおーっ!』『』『』』』』』

「やる気は充分か?!」

『『『『おおーっ!』『』『』』』』』

Fクラスの士気は高い。これこそが、このクラスの最大の武器だろう。

「今回の戦闘は、敵を教室内へ押し込むことが重要だ。

したがって、開戦直後に発生するであろう渡り廊下戦は絶対に負けられん。

そこで今回、前線指揮は姫路瑞希に取ってもらう。姫路、頼んだぞ」

「は、はい。頑張ります」

あらかじめ打ち合わせてあったものの、瑞希は緊張気味に答えた。

「戦力も、クラスの四十名をつぎ込む、これで負けたら後はない、野郎ども、きっちり死んでこい!」

『『『『うおおーっ!』『』『』』』』』

雄叫びをあげるFクラス生徒。そしてその瞬間、運命を告げるチャームが鳴った。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『『『サー、イエッサー』』』』

気合いとともに出陣するFクラス前線部隊。

廊下で待機していた、数学の長谷川教諭、英語Wの山田教諭。

それに物理の木村教諭も移動を開始する。

と、渡り廊下向こうにBクラス生徒が現れた。

「高橋先生を連れているぞ！」

「人数は十人程度だ囲んでフクロにしろ！ 生かして帰すなーっ！」

どこぞのチンピラのようなセリフを皮切りに、戦闘が開始される。

次々と召喚獣が召喚され、戦いが開始されるが、表示される相手召喚獣の点数はどれも高く、

Fクラス生徒の点数の二倍以上はある。

『Fクラス 近藤吉宗 総合764点 Bクラス 野中長男 総合1943点』

ズバッ！

『Fクラス 武藤啓太 数学69点 Bクラス 金田一祐子 数学159点』

ズドッ！

『Fクラス 君島博 物理77点 Bクラス 里井真由子 物理1

52点』

ズンッ！

次々に打ち倒されるFクラスの召喚獣。明久はその戦力差を改めて実感した。

「くっ、とどめを刺されていない人は一度下がって別フィールドへ。点数に余裕のある人は他の人をフォローして！」

矢継ぎ早に指示を出す。

「戦力を分断されないように、各個撃破を避けるんだ！」

各教科フィールドでは仲間たちが奮戦している。

「せいっ！」

英語Wでは、外国語が得意な終夜が奮戦している。帰国子女だが、五カ国語を話せるという。もっとも、ライティングは苦手なのだそうだ。

それでも、表示されている点数は156とBクラス並だ。

ほかのフィールドでも、物理では美波が、数学ではクリスが何人かの仲間と奮戦中だ。

だが、一部の例外をのぞいて、全体的には押され気味ではある。とそこへ、ピンクの髪の少女とちっちゃな女の子達が到着した。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

「み、みんな、は、はいよ」

「はあ：ふう：や、やっと追い付いた」

息を切らせる瑞希とひばりとつぐみ、3人は特に運動が苦手なため、体力の余った男子生徒の全力疾走についてこれなかっただろう。

「来たぞ！ 姫路瑞希だっ！」

Bクラス側から声が挙がる。それに伴い、Bクラス生徒の表情が一様に堅くなった。

「姫路さん、来たばかりでわるいんだけど、おねがいできるかな？」

明久は、ほんの一瞬だけ迷うそぶりを見せたものの、すぐに指示を出した。

「は、はい。行って、きます」

呼吸を整えるまもなく、瑞希は戦場へとトタトタ向かう。その姿は、とてもなごむものだ。

バカテスト 第十五問

問題 科学

豆電球など多くの発明をし後に発明王と呼ばれた科学者の名前を述べよ、

またその人の残した言葉とは何か？

姫路瑞希&雨宮つぐみ&支倉ひばりの答え

『?エジソン』

『?天才とは1%の閃きと99%の努力である』

教師のコメント

正解です、彼は幼少時、教師に頭が腐っているとわれ馬鹿にされると言った話が有名ですね。

遠月優羽の答え

『?1%の閃きがあれば99%の無駄な努力をしなくてよい』

教師のコメント

これはエジソンが言った本来の言葉と言われていますね。

しかし記者の誤解により彼の名言が生まれたといわれていますが、

通説ではないので残念ながら不正解です。

吉井明久の答え

『? エンジン』

教師のコメント

絶対一人はこう書くと思いました。

水野彩華の答え

『? ガリレオ』

教師のコメント

コペルニクスもといいたいのですか？

エレノアの答え

『? エジソン』

教師のコメント

合ってるんですけど、複雑です。

第16問

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数
学勝負を申し込めます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「律子、私も手伝う！」

さっそく勝負をいどまれたのか、律義に返事して言う。

一人相手に二人がかりで挑むあたりはかなり警戒しているようだ。

「「^{サモン}試獣召喚！」」

三人の声が重なり、三体の召喚獣が現れた。

喚声に応えて魔法陣が展開。おなじみの召喚獣が顔を出す。

瑞希の方には鎧を着て、背丈の倍くらいある大剣を持ったデフォル
メされた瑞希が現れた。

瑞希の相手の召喚獣は剣と槍を構えている。

「わあゝ」

「結構良い点とれたんだね」

「瑞希ちゃん、凄い！」

ひばりとつぐみと彩華はある部分を見て呟いた。

それを見て明久と冬久は不思議そうにしてからある違和感に気づい

た。

「ん？ 瑞希の召喚獣ってアクセサリしてるのか？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

辰也が瑞希の召喚獣の腕に気づいて問いかけると瑞希は笑顔で答える。

瑞希の召喚獣は左手首に腕輪をしていた。

「そ、それって!？」

「私たちが勝てるわけじゃないじゃない!」

二人が青ざめて呟いた。とんでもない奴を相手にしるといった感じの雰囲気だ。

「ねえ、ひばりにつぐみ。どうしてあの二人は焦ってるの？」

「もう、忘れたの？ 腕輪をしてるってことは特殊能力が使えるってことなんだよ？」

「特殊能力はその人によって違うけどね」

明久が二人を見て聞くとひばりとつぐみは呆れながら説明した。

「じゃ、いきますね」

そう言って瑞希の召喚獣が左腕を敵の方に向ける。

「ちょっと待ってよ!？」

「律子! とにかく避けないと!」

二人は大きくはねて大袈裟なくらいに横に跳んだ。
その直後に瑞希の召喚獣の腕輪が光を発し：

キュボツ!

「きゃあああーっ!」

「り、律子!」

瑞希の召喚獣から光がほとばしり、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が
炎に包まれる。

『Fクラス 姫路瑞希 数学 412点 VS

Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学 189点 & 151点

』

腕輪とは、400点以上の点数を取った人につけられて、
それぞれ特殊な能力を使うことができるのだとか。

「ど、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ」

律義に謝りながら瑞希は大きく避けてバランスを崩した敵に肉薄し、
大剣を振り下ろす瑞希の召喚獣。相手の武器ごと一刀両断し、決着
は一瞬でついた。

「い、岩下&菊入が戦死したぞ!」

「なっ！ そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

どうやらBクラス前線の残り八人の士気を下げられたようだ。

「よそみしてていいのか？」

終夜がそう言うのと召喚獣を動かして

「しまっ！」

ザシュ！

終夜の召喚獣は刀で相手の召喚獣の腕を斬り落とす。

他の奴らが慌てて遅いかかるけど、慌てず終夜の召喚獣は周りに集まっていたのを一閃した。

「み、みなさん、頑張ってください！」

普段の瑞希からは想像できない大きな声。

それは、指揮するものとしては褒められる内容ではないものの、前線部隊のみんなのやる気を引き出した。

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

「真希ちゃんもステキだぜーっ！」

それでも士気がかなり上がった。

「みいちゃん、とりあえず下がってください」

「あ、はい」

真希ちゃんはみい姉に話しかけて言う。

特殊能力は威力の分だけ消耗が激しいという話なのだ。

瑞希に余計な消耗をさせないためにも一端下がるように指示する。
むやみやたらに瑞希だけを戦わせても消耗が激しすぎるためだ。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退しろ！ 戦死だけはするな！」

Bクラス側も損耗を気にして後退をかけるようである。

戦況は、Fクラスに傾きつつある。

瑞希を中心にして、少しずつ押し込めば、当初の目標は達成できそうである。

「明久に冬久に終夜よ」

「秀吉？ どうしたの？」

「どうかしたの？」

「どした？」

優位に推移する戦況を見ていた明久達に、秀吉が話しかけた。

「うむ、ワシらは教室に一端戻ろうと思うのじゃ」

「補給テスト？」

秀吉は明久達を見て言うのと冬久が不思議そうに聞いた。

「違うと思うよ、フユくん。木下君達はそんなに疲弊してるように見えないし」

ひばりの言う通り、秀吉もその仲間達もそう減ってるようには見えない。

「もしかして、Bクラスの代表のことやね？」

いつのまにか来てた巧が秀吉を見て聞いた。

「うむ。あの根本なのじゃ」

秀吉は頷いて答えた。

「あのってことは、あの根本恭二？」

「うえっ、Bクラスの代表って、あいつなの？　　うわ、最悪……」

「それって最悪すぎだよ」

「うむ」

明久が言うとはひばりとつぐみは本気で嫌そうに言い、秀吉は頷いた。彩華は不思議そうに小首を傾げていた。

「たしかに、あの男が代表ってことなら警戒した方がええかもしれない」

「あの最低男かよ」

巧も顔に嫌悪感があらわれている。
冬久ですら嫌悪感があるかの表情で言う。

「カンニング上等、競争相手に一服盛る、喧嘩に刃物は当然。まさに卑怯を体現したような男じゃ」

「あんなのに雄二がおくれを取るとは思えないけど、一度ようすを見にいった方がよいかもね。

姫路さん、辰也！」

明久が秀吉の説明を聞いて瑞希と辰也の方に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7719w/>

ちみっこ団と三つ子と召喚獣

2011年12月21日20時56分発行